

るが原位置に近い状態と考える。ほかに石造物は27号墓の南側に空風輪1基 (S117) があるが、どの遺構に伴うものかは不明である。

27号墓は地輪1基 (S118) が、標高62.50mから62.73mの間に位置する。地輪の下より、10cm四方、厚さ5cmの範囲で骨片が出土している。骨片の総量は190gを量る (B49)。

28号墓は石仏1基 (S119) が、標高61.59mから62.02mの間に位置する。石仏の背後より12cm四方、厚さ4cmの範囲で、骨片が出土している。骨片の総量は380gを量る (B50)。

29号墓は28号墓と同じ形態の石仏1基 (S120) が北に並列する。石仏は標高61.92mから62.07mの間に位置する。石仏の前面より15cm四方、厚さ11cmの範囲で骨片が出土している。骨片の総量は57.5g (B51)。

30号墓は横転した石仏1基 (S121) が標高61.67mから62.02mの間に位置する。骨片が石仏の下より9cm四方、厚さ5cmの範囲で出土している。骨片の総量は67.5gを量る (B52)。その北にある山石の下より23cm×15cm、厚さ10cmの範囲でも骨片が出土している。骨片の総量は280gを量る (B53)。

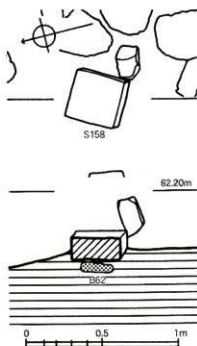
31号墓、32号墓、33号墓 (第73図、図版第四六①②)

D群石造標識墓群西列の30号墓と34号墓の間に、31号墓・32号墓・33号墓の3基が位置する。南部に31・32号墓の地輪 (S144・S147) が南北方向に並列し、北部にコの字状に石を並べる33号墓がある。33号墓は石仏1基 (S152) が横転し、上に石が数個乗っているが、石仏はほぼ原位置に近いと考えられる。石造物はほかに31・32号墓東側に空風輪3基 (S143・S145・S146) と板碑破片1片 (S148) が、33号墓の北側に板碑3基 (S153・S154・S156) と石仏1基 (S155) があるが、これらのどの遺構に伴うかは不明である。

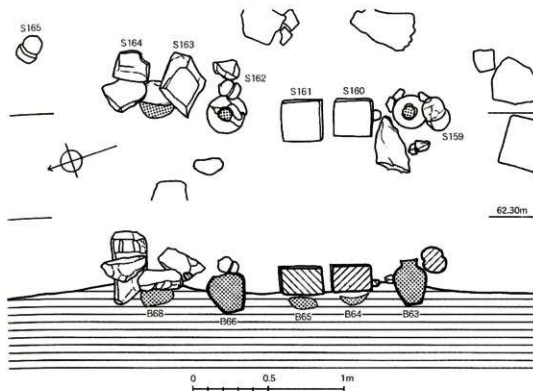
31号墓は地輪1基 (S144) が、標高61.64mから61.82mの間に位置する。地輪の下より20cm四方、厚さ13cmの範囲で骨片が出土している。骨片の総量は660gを量る (B54)。さらに地輪東側の空風輪2基 (S143・S146) の間でも、10cm四方、厚さ5cmの範囲で骨片が出土している。骨片の総量は57.5gを量る (B55)。

32号墓は地輪1基 (S147) が、標高61.67mから61.85mの間に位置する。地輪の下より24cm×22cm、厚さ12cmの範囲で骨片が出土している。骨片の総量は450gを量る (B56)。さらに地輪東側の空風輪 (S145) の下でも、17cm×15cm、厚さ6cmの範囲で骨片が出土している。骨片の総量は110gを量る (B57)。

33号墓はコの字状に石が並ぶ。石仏 (S152) の上にも石が乗るなど、検出時のすべての石が原位置ではないと思われる。前述のように石仏は横転して石が上に乗っているが、石仏は原位置に



第74図 坂ノ下中世墓D群34号墓
実測図 (縮尺1/25)



第75図 坂ノ下中世墓D群35・36・37・38・39号墓実測図（縮尺1/25）

近いと思われる。石仏の下より20cm四方、厚さ13cmの範囲で骨片が出土している。骨片の総量は210gを量る（B58）。コの字状石列の西側隔より25cm四方、厚さ12cmの範囲でも骨片が出土している。骨片の総量は820gを量る（B59）。また石仏下の骨片上面では鉢の口縁部破片1片（第90図1、図版第六〇④）が出土している。

34号墓（第74図、図版第四六②）

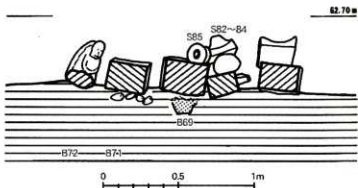
D群石造標識墓群西列、33号墓と35号墓の間に34号墓が単独で位置する。地輪1基（S158）が標高61.74mから61.94mの間に位置する。他に石造物は地輪西側に火輪1基（S157）があるが、本道槽に伴うものかは不明である。地輪の下より22cm四方、厚さ7cmの範囲で骨片が出土している。骨片の総量は140gを量る（B62）。

35号墓、36号墓、37号墓、38号墓、39号墓（第75図、図版第四六②・四七①②）

D群石造標識墓群西列、34号墓の北方に35号墓、36号墓、37号墓、38号墓、39号墓の5基が位置する。36・37号墓の地輪2基（S160、S161）を中心に、向側に35・38号墓の蔵骨器が並び、38号墓の北側に39号墓が並列する。35号墓は口縁部を打ち欠くほかは、完存の蔵骨器1個（第87図1、図版第五九②）が、標高61.79mから62.08mの間に位置する。周辺に山石数個があるが、蔵骨器の周りを囲んでいたものかは不明である。蔵骨器の南側肩に空風輪（S159）があるが、本道槽に伴うか否かは不明である。骨片は土と混在して蔵骨器の頸部付近まで入れられている。骨片の総量は

630gを量る (B63)。36号墓は地輪1基 (S160) が標高61.78mから62.00mの間に位置する。35号墓との間に山石が数個あるほかは、周辺に石造物はない。地輪下より20cm四方、厚さ5cmの範囲でレンズ状に骨片が出上している。骨片の総量は130gを量る (B64)。

37号墓は地輪1基 (S161) が標高61.78mから61.98mの間に位置する。付近に石造物などはない。地輪の下より17cm四方、厚さ6cmの範囲で骨片が出土している。骨片の総量は140gを量る (B65)。しかし地輪北側にも一部骨片が点在し、38号墓の骨片と明確に区別できない。38号墓は頸部より上を打ち欠く蔵骨器1個 (第87図



第76図 坂ノ下中世墓D群40・41・42・43・44号墓
実測図 (縮尺1/25)

⑥、図版第六〇②) が標高61.65mから61.93mの間に位置する。蔵骨器の東側肩に空風輪1基 (S162) があるが、本遺構に伴うかは不明である。骨片は土と混在して打ち欠かれた蔵骨器の頸部近くまで入れられている。しかし、蔵骨器の胴部上半が割れているため、付近に骨片が散在し、前述のように37号墓の骨片と明確に区別することができない。骨片の総量は蔵骨器内部のものが850g (B66)、蔵骨器周辺のものが200g (B67) を量る。

39号墓は板碑2基 (S163・S164) を並列し、その間に長方形の石を置く。南側の板碑 (S163) は上半部を欠失し、前面に倒伏しているが、原位置に近いと考えられる。板碑は標高61.87mから62.10mの間に位置する。北側の板碑 (S164) も上半分を欠失するが、基部前面に山石を置き原位置から動いていないと考えられる。板碑は標高61.73mから62.20mの間に位置する。板碑の間に置かれた石の下より、23cm四方、厚さ12cmの範囲で骨片が出上している。骨片の総量は300gを量る (B68)。

40号墓、41号墓、42号墓、43号墓、44号墓 (第76図、図版第四八①②)

D群石造標識墓群中央列、26号墓L字状石列の短辺北側に40号墓・41号墓・42号墓・43号墓・44号墓の5基が位置する。40号から43号墓の4基は地輪が、44号墓は石仏がそれぞれ原位置に近い状態で南北方向に並列する。

40号墓は地輪1基 (S81) が標高62.19mから62.41mの間に位置する。地輪東側に一部重なるよう

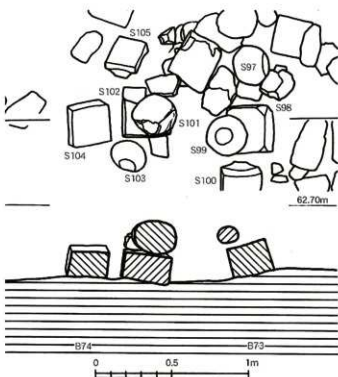
に火輪1基(S80)があるが、本遺構に伴うものか否かは不明である。本遺構に伴う骨片の出土は見られなかった。

41号墓は地輪1基(S84)が標高62.16m～62.34mの間に位置する。地輪の上に、水輪1基(S83)と火輪1基(S82)がほぼ原位置、つまり組合った状態で出土している。また北側に位置する42号墓の上面に空風輪1基(S85)がある。後に石造物の説明のところで述べるが、これら空風輪、火輪、水輪、地輪は、本遺跡で確実に対になる1例である。本遺構に伴う骨片の出土は見られなかった。

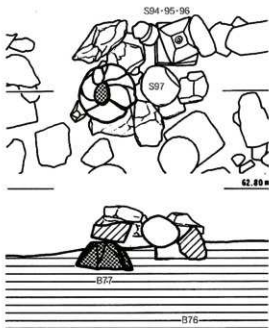
42号墓は地輪1基(S86)が標高62.16mから62.41mの間に位置する。地輪の下に蔵骨器1個(第88図②、図版第六〇③)が存在する(図版第四十九①)。蔵骨器は胴部上半が地輪の重量に押圧されて割れているが、胴部下半はほぼ完形である。蔵骨器の底部は62.05mに位置する(図版第四十九①)。内部より骨片が出土している。骨片の総量は140gを量る(B69)。

43号墓は地輪1基(S90)が標高62.19mから62.44mの間に位置する。地輪の下に10cm前後の山石4個が存在し、その下から微量ながらも骨片が出土している。骨片の総量は2.6gを量る(B71)。

44号墓は石仏1基(S91)が標高62.20mから62.45mの間に位置する。石仏は転倒して正面が上を向くが、ほぼ原位置と思われる。石仏の下から微量ながらも骨片が出土している。骨片の総量は2.0gを量る(B72)。



第77図 坂ノ下中世墓D群45・46・47号墓
実測図(縮尺1/25)



第78図 坂ノ下中世墓D群48・49号墓実測図(縮尺1/25)

45号墓、46号墓、47号墓（第77図、図版第四九②）

D群石造標識墓群中列、44号墓の北方に45号墓・46号墓・47号墓の3基が位置する。いずれも原位置に近いと考えられる状態で地輪が並立する。

45号墓は地輪1基（S98）が標高62.25mから62.50mの間に位置する。地輪の上に水輪1基（S99）が載る。またそのすぐ西側には火輪1基（S100）がある。火輪はあたかもすぐ脇の水輪から転落したかの状態であり、空風輪は欠くものの火輪、水輪、地輪の3基は対になると思われる。地輪の下より微量ながらも骨片が出土している。骨片の総量は2.8gを量る（B73）。

46号墓は地輪1基（S102）が標高62.17mから62.40mの間に位置する。その上に風化した水輪1基（S101）が載る。周囲に山石数個が点在し、西側には水輪1基（S103）がある。地輪の下、周囲から骨片の出土は見られなかった。

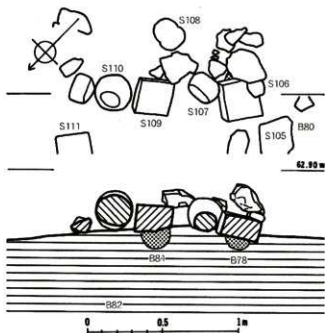
47号墓は地輪1基（S104）が標高62.23mから62.44mの間に位置する。北側に空風輪1基（S112）と山石数個があるが、本遺構に伴うか否かは不明である。地輪の下より微量ながらも骨片が出土している。骨片の総量は1.5gを量る（B74）。

48号墓、49号墓（第78図、図版第四九②）

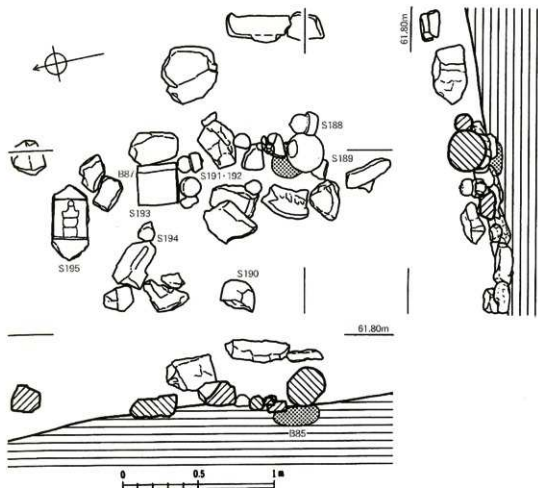
D群石造標識墓群東列の南部、45号墓の東側に48号墓・49号墓の2基が位置する。東列のうちこの2基は中央列とはほぼ同じ方向に並列する。

48号墓は地輪1基（S94）が標高62.36mから62.48mの間に位置する。地輪の上に直接に火輪1基（S95）が載る。その北側に空風輪1基（S96）が、同じく西側に水輪1基（S97）がある。つまり空風輪と水輪がそれぞれ転落し、地輪の上へ火輪がずり落ちた状態であり、これら空風輪から地輪までの4個が対になると考えられる。南側に山石があるが、本遺構に伴うか否かは不明である。地輪の下より5cm四方、厚さ3cmの範囲で骨片が出土している。骨片の総量は27.5gを量る（B76）。

49号墓は扁平な山石数個で覆い、底部を打ち欠いた播鉢1個が存在する。播鉢の北側が一部露出するが、扁平な山石は播鉢を覆い隠すためのものであろうと考えられる。播鉢は標高62.26m～62.45mの間に位置する。右遺物は南側の48号墓に伴うと思われるもの以外、周囲にはない。伏せた播鉢の中より骨片が出土している。骨片の総量は10gを量る（B77）。



第79図 坂ノ下中世墓D群50・51号墓実測図（縮尺1/25）



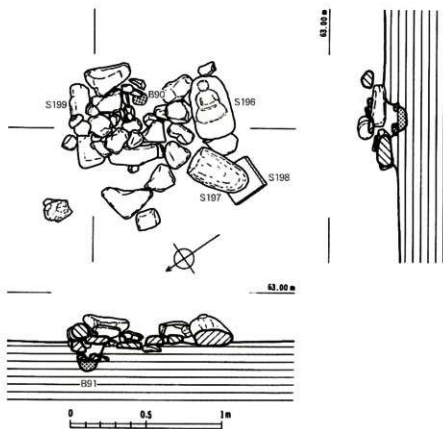
第80図 坂ノ下中世墓D群52号墓実測図(縮尺1/25)

50号草、51号草（第79回、国版第四九②）

50号窯は地輪1基（S106）が標高62.43mから62.62mの間に位置する。北側に水輪1基（S107）と西側に火輪1基（S105）があり、空風輪を欠くものの火輪と水輪は地輪と対になる可能性がある。周囲に山石数個があるが、本遺構に伴うか否かは不明である。地輪の下より17cm四方、厚さ7cmの範囲で骨片が出土している。骨片の総量は37.5gを量る（B78）。火輪のドを中心とした位置でも骨片が出土している。こちらの骨片の総量は300gを量る（B80）。

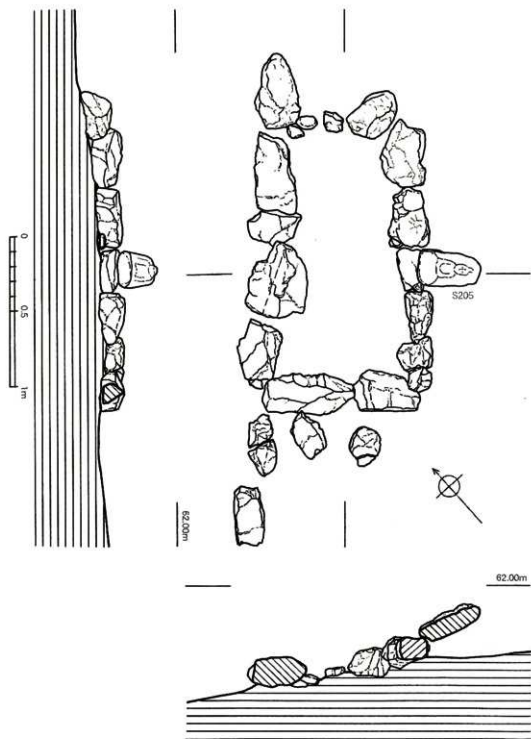
51号墓は地輪1基(S109)が標高62.48mから62.67mの間に位置する。北側に水輪1基(S110)と東側に空風輪1基(S108)がある。周辺に山石数個があるが、本遺構に伴うか否かは不明である。地輪の下より20cm四方、厚さ12cmの範囲で骨片が出土している。骨片の総量は57.5gを量る(B81)。また水輪の下からも微量ながら骨片が出土している。骨片の総量は5.4gを量る(B82)。

以上、ここまでD群でも26号墓の南側から北側の全面に、3列にそれぞれの造営方向を揃える27号墓から51号墓について述べてきた。D群の概要でも触れたように、これらの墓は集石や区画の石

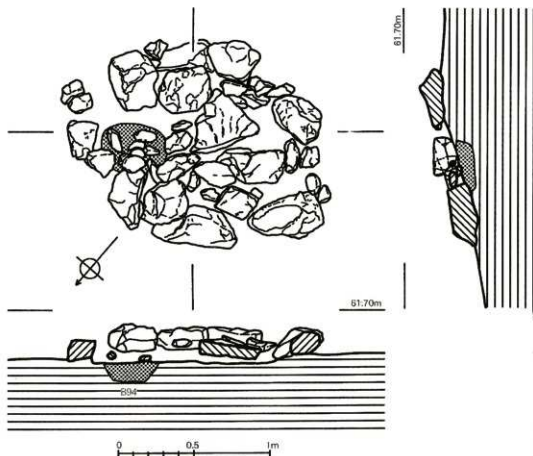


第81図 坂ノ下中世墓D群53号墓実測図(縮尺1/25)

がなく、五輪塔などの石造物単体を個々の遺構の基本とするものである。これに対して次から説明する52号墓から58号墓は、それぞれの違いが大きい。石造物についても五輪塔は伴っているが、石仏と板碑については周辺で出土しているものの、それらが確実に伴うものとは言えない。また骨片の出土状況についても、蔵骨器から出土するもの(58号墓)、納骨坑から出土するもの(53号墓)、土中から直接まとまって出土するもの(55・56・57号墓)、掘削中に周辺から散在するように出土するもの(52号墓)、または区画そのものは良好に残っていると思われたが、まとまった骨片の出土は見られなかったもの(54号墓)など様々である。またそれらの配置も規則性がなく、せいぜい54号墓と55号墓が隣接し、この2基の長軸に揃うように56号墓と57号墓が並んでいる。つまり27号墓から51号墓の石造標識墓群に近い中世墓は、明確な区画や石造物が不明であることから、石造標識墓群の造営によって、もしくはそれらが造営される以前に破壊された可能性がある。またD群はA・B・C群が平坦面に展開する立地とは異なり、その北側の緩斜面に展開している。これはA・B・C群が造営されたあとにその近くに造営する必要があったから、あえて平坦面ではなく、この緩斜面に造営しなくてはならなかったのではないであろうか。つまり石造標識遺構群の造営に際して破壊されたのではなく、緩斜面にあったために自然に崩壊した可能性も十分に考えられる。そして崩壊して流失していた骨片を集めて再整理したのが、26号墓に埋納されていた7箇



第82図 坂ノ下中世墓D群54号墓実測図（縮尺1/25）



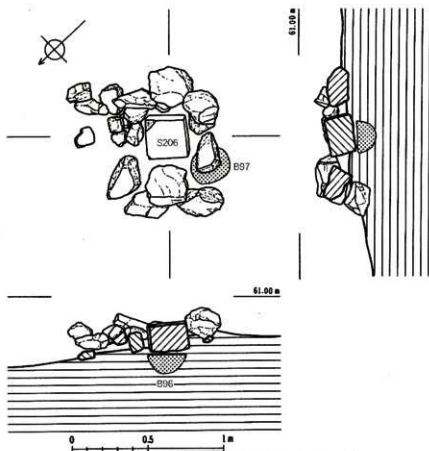
第83図 坂ノ下中世墓群55号墓実測図 (縮尺1/25)

所にも及ぶ骨片の出土となったと解釈することができる。また伝世の問題を無視すれば、かろうじて残されていた58号墓の蔵骨器が本中世墓群でも古い時期に属することからも説明がつくものである。つまりD群は新しい石造標識墓群とそれに先行する方形区画墓の二種類、二時期のもので構成されると言えよう。

以下、前置きが長くなったが52号墓から58号墓について説明していく。

52号墓 (第80図、図版第五②)

52号墓は調査区北西部、石造標識墓群西列 (38号墓) より約2m西方に位置する。本遺構は当初、明確に区画された石がないことから墓としては認識していなかった。しかし石造物が多数集中し、掘削中に骨片がまとまって出土したことから、墓と判断した。墓としての形態は明確ではないが、推定すれば標高61.17mから61.50mの間に位置する7、8個の石がグリットラインの方向に沿ってL字状に並ぶ。このことから方形区画墓であったと考えられる。L字状に並ぶ石列の内側に、水輪 (S189) と空風輪 (S188) の各1基がある。石造物はこのほかに板碑1基 (S195) と板碑の破片1片 (S190) があるが、本遺構に伴うものかは不明である。水輪の下より、32cm×23cm、厚さ15cmの範囲で骨片が出土している。骨片の総量は490gを量る (B85)。この北側に地輪1基 (S193)



第84図 坂ノ中世墓D群56号墓実測図（縮尺1/25）

と空風輪2基（S191・S192）が存在する。地輪の下より骨片が出土している。骨片の総量は17.5gを量る（B87）。また表土掘削中にも骨片が出土し、それらは総量240gを量る（B86）。

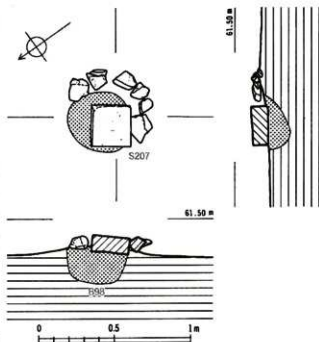
53号墓（第81図、図版第五四①）

53号墓はD群北部の調査区東端に位置し、石造標識墓群東列（51号墓）より2.5m北東方に位置する。区画が南側には見られないものの、北側と東西の二方向に石列の区画が「コ」の字状に並ぶことから、本来は方形区画を呈していたと思われる。南北長0.8m、東西長0.7mを測る。区画を構成する石は転石して丸みのある花崗岩と考えられ、ほかの方形区画が付近の山石で構成される点と大きく異なる。石造物は区画の南側に石仏2基（S196・S197）と火輪1基（S198）が、区画の北側には空風輪1基（S198）がある。いずれも本遺構に伴うかは不明である。方形区画北辺の石の下に上面を10cm前後の山石で囲った納骨坑が存在する。上面13cm×17cm、深さ6cmを測る。納骨坑より骨片が出土している。骨片の総量は230gを量る（B91）。また区画中央部でも12cm四方、厚さ5cmの範囲でも骨片が出土している。骨片の総量は27.5gを量る（B90）。

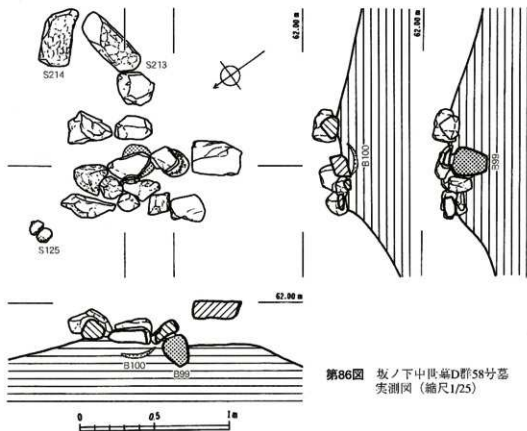
54号墓（第82図、図版第五六②五七①②）

54号墓はD群北部に位置し、55号墓に南接する。60cmから15cm前後の山石で区画し、区画内に

は石を充填しない。長方形の区画を呈し、南北長1.9m、東西長1.3mを測る。北辺61号墓の南辺を利用し、東・西・南の三辺のみを区画したと思われる。山側を区画する石は標高61.35mから61.65mの間に、谷側を区画する石は標高61.25mから61.50mの間に位置する。つまり区画周囲の石は立地する地形の傾斜に合わせて配置したようである。区画東辺の中央の右上面に石仏1基(S205)が背後へ転倒した状態で出土している。出土状態からは本遺構に伴うとは断定できない。区画内部の土層には特に変化が見られず、骨片の出土は散在的に見られるものの、集中して出土している部分はない。骨片の総量は僅か4.4gを量るに過ぎない(B93)。



第85図 坂ノ下中世墓D群57号墓実測図(縮尺1/25)



第86図 坂ノ下中世墓D群58号墓実測図(縮尺1/25)

55号墓（第83図、図版第五六②五七①②）

55号墓はD群北部に位置し、54号墓と南接する。50cm前後とやや大きめの山石で区画し、方形区画を呈する。南北長1.7m、東西長は1.3mを測る。山側を区画する石は標高61.35mから61.70mに、谷側を区画する石は標高61.20mから61.45mの間に位置する。つまり54号墓と同様に区画の石を周辺地形の傾斜に合わせて置き、区画内の石は周囲の石よりやや低くなるように配置したようである。周辺に石造物はない。区画内北部に15cm前後の山石8個を集め、その下より38cm×35cm、厚さ11cmの範囲で骨片が出土している。骨片の総量は780gを測る（B94）。

56号墓（第84図、図版第五五①②）

56号墓はD群北端、57号墓の東方に位置する。周囲に10cmから25cm前後の山石を配し、中央に地輪1基（S206）を置く。明確な区画を呈さず、中央の地輪を中心として不規則に石を集めている。南北長0.55m、東西長0.52mを測る。地輪は標高60.63mから60.83mの間に、周囲の山石は標高60.58mから61.92mの間に位置する。地輪の他に石造物はない。地輪の下、26cm×23cm、厚さ14cmの範囲と、地輪東の山石の下で25cm四方、厚さ11cmの範囲の2箇所骨片が出土している。骨片の総量はそれぞれ430g（B96）と470g（B97）を量る。

57号墓（第85図、図版第五四②）

57号墓はD群北端、55号墓の北に位置する。東側と南側に10cm前後の山石6個を置き、中央に地輪1基（S207）を置く。地輪は標高59.88mから60.00mの間に位置する。地輪のほか石造物はない。地輪の下より、40cm四方、厚さ25cmの範囲で骨片が出土している。骨片の総量は120gを量る（B98）。

58号墓（第86図、図版第五八①②）

58号墓はD群西部に位置し、近接する中世墓はない。石の長軸を揃えるが、配列に規則性はなく、集石墓の範疇に含まれると考えられる。南北長1.2m、東西長0.75mを測る。西側中央の石1個が河原石であるほかは山石で構成される。石は標高61.70mから62.03mの間に位置する。付近に空風輪1基（S125）と板碑3基（S212・S213・S214）があるが、本遺構に伴うものかは不明である。集石の南部に口縁部を打ち欠いた三筋壺が、やや北方に傾いて出土している。三筋壺は標高61.55mから61.77mの間に位置する。頸部付近まで土を混ぜた骨片を詰め、打ち欠いた頸部を偏平な石で蓋をする。骨片の総量は460gを量る（B99）。また三筋壺のすぐ北側でも25cm×23cm、厚さ4cmの範囲にレンズ状に骨片が出土している。骨片の総量は280gを量る（B100）。

第7章 坂ノ下中世墓群の遺物

ここでは主に中世墓から出土した中世の遺物について述べるが、一部は明らかに近世まで降る時期の陶磁器類もあることを断っておく。

第1節 蔵骨器

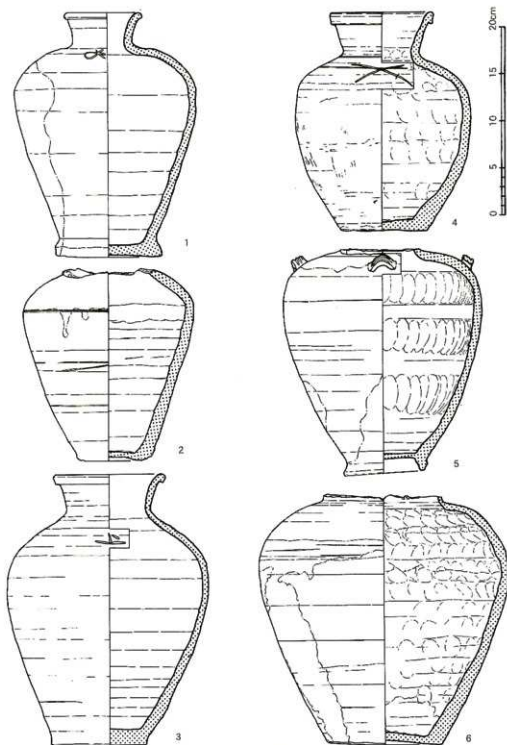
ここでは容器内に骨片があって蔵骨器として出土した9点について説明する。

三筋壺（第87図2、図版第五九④）は頸部より上を打ち欠くがほぼは完存する。底部から直線的に立ち上り、肩部がやや強く屈曲して頸部にいたる。三本の筋は単線で、所々筋が途切れている部分も見られる。成形は粘土紐輪積み作りで、5段積み上げる。調整は全体に雫であり、外面に輪積み痕を残し、粘土の小塊をそのまま付着させている。底部も粘土塊を付着したままでやや安定に欠ける。外面は黒味がかった灰色を呈し、肩部より上に緑釉を施し、数条が胴下部まで流れ落ちる。胎土は黒色の粒子を少量含む灰色を呈する。越前古窯跡群で生産されたものであろう。胴部最大径18.2cm、低部径8.0cm、現存高20.3cmを測る。容積は2,220mlを量る。D群58号墓より出土した。

瓶子（第87図1、図版第五九⑤）は口縁部の一部を欠くのみでほぼは完存する。底部周囲に2cm幅の粘土帯を張り付け、低部の広がり形成する。貼り付けた粘土帯の上から直線的に立ち上り、肩部でやや丸味をおびて頸部にいたる。頸部は小さくすぼまり、軽く外反ぎみに口縁部へいたる。口縁端部は丸味を持つ。頸部と肩部の間に結び目を表現したようなへら記号を施す。成形は粘土紐輪積み作りで、5段を積み上げると思われる。調整はやや雫で、輪積み痕を残す部分が見られる。外面は茶褐色を呈し、肩部より上に緑色おびた乳白色の釉を施す。胴部の一部は露胎する。胎土は黒色粒子をわずかに含む灰色を呈する。越前古窯跡群で生産されたものであろう。口縁部径7.6cm、胴部最大径19.3cm、低部径11.3cm、器高25.8cmを測る。容積は3,080mlを量る。D群26号墓より出土した。

四耳壺（第87図5、図版第五九⑥）は頸部より上を打ち欠き、高台の一部を欠損する。底部より丸味をもって立ち上り、肩部も丸味をもって頸部にいたる。高台の作りは雫であり、安定しない。耳は4ヶ所のうち1ヶ所のみ残り、ほかは基部より欠失し貼り付けの痕跡を残す。成形は粘土紐輪積み作りで、5段を積み上げると思われる。調整はやや雫に行われる。外面全体にわずかに緑色をおびる乳白色の釉を施すものの、全体に剥落が激しい。胎土は白色の粒子をごく少量含む灰色を呈する。瀬戸古窯跡群で生産されたものであろう。胴部最大径21.0cm、底部径8.4cm、脚高1.7cm、現存高23.8cmを測る。容積は4,000mlを量る。A群4号墓より出土した。

広口壺（第87図6、図版第六〇⑦）は頸部より上を打ち欠くがほぼは完存する。底部より直線的に立ち上り、肩部で丸味をおびて屈曲し頸部にいたる。打ち欠かれた頸部は口縁部にかけての立ち

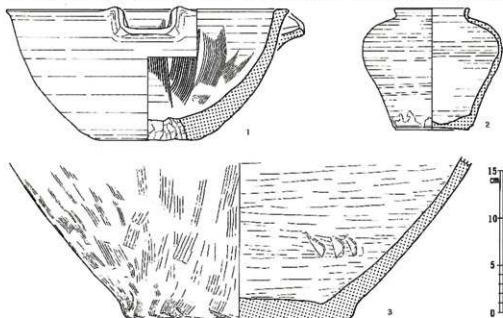


第87図 坂ノ下中世墓群出土藏骨器実測図①(壺) (縮尺1/4)

上りを若干残す。成形は粘土紐輪積み作りで、4段もしくは5段を積み上げる。調整は全体にヨコナデを丁寧に施すものの、肩部付近にナデによる段を残す部分がある。頸部から肩部の間を中心に5mm前後の粘土塊を多数付着させている。また内側全面に指頭痕を残す。外面は赤茶褐色を呈し、低部より上に緑がかった乳白色の釉を施し、一部底部まで幅広く流れ落ちる。胎土は黒色粒子を少量含む灰色を呈する。越前古窯跡群で生産されたものであろう。胴部最大径26.2cm、底部径12.2cm、現存高26.4cmを測る。容量は6,780mlを量る。D群38号墓より出土した。

壺（第87図3、図版第五九②）は口縁部のごく一部を欠くのみではかは完存する。底部より1cmほど真上へ立ち上った後、直線的に肩部へいたる。肩部は張らずゆるやかに頸部へいたる。頸部は軽く外反して口縁部へいたる。口縁端部は丸味を持たせて折り返している。粘土紐積み作りで、5段を積み上げていると思われる。肩部よりやや上に「上」字状のへら記号を施す。調整は全体に丁寧である。外面は赤褐色を呈し、釉を施さない。胎土は黒色粒子をごく少量含む灰色を呈する。越前古窯跡群で生産されたものであろう。口縁部径11.2cm、胴部最大径21.5cm、底部径10.1cm、器高28.4cmを測る。D群35号墓より出土した。

小型の壺（第87図4、図版第六〇①）は口縁部の一部を欠くのみではかは完存する。底部より丸味をもって立ち上る。肩部は張るが、胴部下半が丸味をもつためかさほど目立たない。肩部より丸味をもって頸部にいたり、頸部から直線的に外反して口縁部にいたる。口縁端部は丸味をもたせて折り返し、外面に1cmほどの幅の面を有する。全体に安定した感じを与える。成形は粘土紐輪積み作りで、4段を積み上げていると思われる。肩部に2本の沈線をめぐらせたあと、「×」印のへら記号を施す。調整は肩部より上は丁寧なナデを施すが、胴下半は上方ヘナデのあと一部ヨコ方向にケズリ、凹凸が著しい。外面は釉を施さず、口縁部と肩部は灰色を、頸部と胴下半は赤褐色



第88図 坂ノ下中世墓群出土陶器実測図②（壺その他）（縮尺1/4）

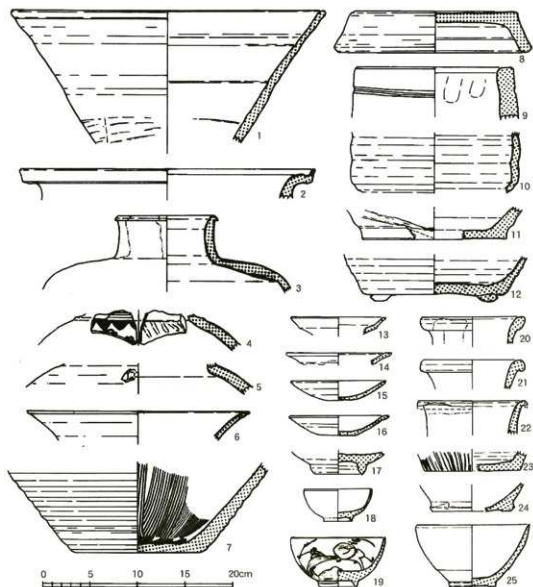
を呈する。胎土は黒色粒子をやや多く含む灰色を呈する。越前古窯跡群で生産されたものであろう。口縁部径10.9cm、胴部最大径18.1cm、底部径8.6cm、器高23.3cmを測る。B群21号墓より出土した。なお出土時すでに肩部付近の輪積み部分と思われる箇所が上下半分に割れていた。埋納する時点で故意になされたものか、使用中に割れたので蔵骨器に転用されたのか、いずれかの可能性が高い。

短頸壺（第88図2、図版第六〇③）は上半部が破片となって出土しているがほぼ完形に復元できた。底部に一度段を設けてから直線的に立ち上り、肩部が大きく張る。肩部よりわずかに丸味をもって頸部に至り、すぐに口縁部が直立して終わる。口縁部は丸味をもち、外面には頸部との間に軽い段をつくる。成形・調整ともにロクロ挽きであり、丁寧な仕上がりとなっている。内外面とも肩部付近にロクロ目を残し、特に肩部の下に強く残す。ロクロの回転方向は時計廻りである。底部付近をのぞき内面まで緑をおびる乳白色の釉を施すが、1/3は剥落して露胎する。胎土は砂粒の混入が見られない灰色を呈する。瀬戸古窯跡群で生産されたものである。口縁部径7.2cm、胴部最大径14.5cm、底部径7.6cm、器高12.8cmを測る。容量は1,000mlを量る。D群42号墓より出土した。

播鉢（第88図1、図版第六〇④④'）は片口の一部と底部中央を欠損する。底部の欠損は故意に打ち欠かれたものによると思われる。底部より内湾ぎみに丸味をもって立ち上り、口縁部直前で軽く外反する。口縁部は水平な平坦面を作り、内側に斜めの段を有する。片口を外方へ引き出すようにして作っているため器形の平面が楕円形となる。成形は粘土紐輪積み作りで2段を積み上げていると思われる。調整はヨコナデを施し、特に口縁部付近を強くナデで仕上げる。櫛目は1単位14本を16単位数え、内側の口縁より1/3下がったところより始めて反対側まで引き上げる。つまり1回の作業で2単位分の櫛目を引いたことになり、計8回の作業によると思われる。内面底部付近を中心に揺目が見えなくなるほど摩滅しており、また底部そのものもかなり摩滅していることから、かなりの使用期間、もしくは使用頻度が考えられる。口縁部平坦面を中心に煤の付着が見られる。胎土は白色と黒色の2種類の砂粒が混入し、緑灰色を呈する。珠洲古窯跡群で生産されたものであろう。口縁部径29.4cm、底部径10.0cm、現存高13.7cmを測る。D群49号墓より出土した。

大甕（第88図3、図版第六三④）は底部付近のみを残す。底部より2cmほど上方へ立ち上がったのちに、やや内湾ぎみに胴部へいたる。成形は粘土紐輪積み作りである。外面を板状工具によるタテ方向のナデもしくはケズリに近い調整を行い（註）、内面は同様な調整をヨコ方向に弱く行う。内面の調整時に指でおさえて器体を巡らしたと考えられる痕跡が明瞭に観察できる。残存する胴部の上端に格子目状のタタキ痕がある。胎土は径5mm前後と径1mm前後の2種類の白色粒子をやや多く含み、わずかに緑がかかった灰色を呈する。口径29.6cm、底部径10.4cm、残存高13.7cmを測る。生産地は不明である。C群24号墓より出土した。

（註）現在、越前焼大甕の作成技法を伝える藤田重良右衛門氏は、ハガタネと呼ぶ同様の調整痕を残す調整方法を持っているとのことである。



第89図 坂ノ下中世墓群出土陶磁器実測図（縮尺1/4）

第2節 陶磁器

蔵骨器を除く陶磁器は約100点あり、それらのほとんどが表土中、または中世墓間の包含層から出土している。ここでは中世・近世をまとめて35点を図示した。

捏鉢

捏鉢は3点（第89図1、11、12）あり、いずれも越前古窯跡群で生産されたものであろう。前2点は中世、最後の1点は近世のものであろう。



第90図 坂ノ下中世墓群出土陶磁器片拓本図①（縮尺1/4）

口縁部外面に弱い段を持つ鉢は1点（第89図1、図版第六二①）ある。体部より口縁部まで直線的に開き、口縁端部に浅い沈線を残す。体部下半の内外面をヨコ方向に削り、ほかはヨコナデ調整する。胎土は径1mm前後の白色粒子を多量に含む赤褐色を呈する。復元口径33.2cm、現存高14.0cmを測る。

底部より一度上へ立ち上ってから体部が開く鉢は1点（第89図11、図版第六二②）ある。内外面ともヨコナデ調整する。底部周辺には重ね焼きの痕跡がある。胎土は径1mm前後の白色粒子を多量に含む明るい灰色を呈し、一部肌色に近い部分もある。復元底部径15.2cmを測る。

底部より丸味をもって立ち上がり、ボタン状の脚を貼り付ける鉢は1点（第89図12、図版第六二④）ある。貼り付けの脚は2個残すが、本来の数は不明である。内外面ともロクロ調整し、体部外面はロクロ目を装飾的に残す。底部以外の内外面に茶色の塗り鉄を施す。胎土は径1mm前後の白色粒子を多く含む明るい灰色を呈する。復元底部径14.8cmを測る。

播鉢

播鉢は2点あり、いずれも近世のものであろう。底部からやや丸味をもって立ち上る播鉢は1点（第89図7、図版第六二⑤）ある。直線的に開く体部外面にロクロ目を装飾的に残す。内面の櫛は1単位8本を数える。体部外面の中位まで茶色の塗り鉄を施す。胎土は径1mm前後の白色粒子を少量含む茶灰色を呈する。復元底部径13.2cmを測る。越前古窯跡群で生産されたものであろう。

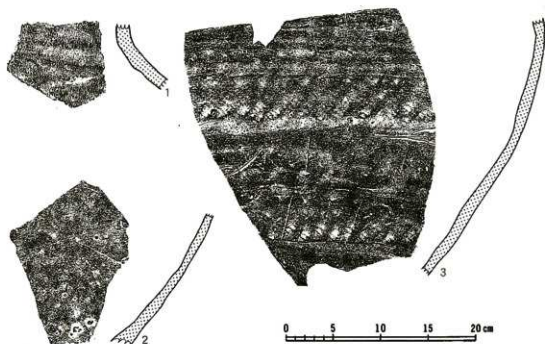
口縁端部で水平に外反する播鉢は1点（第90図1、図版第六一④）ある。口縁の下に凸帯を有する。細片のために内面の櫛1単位の本数は不明である。内外面ともに赤褐色の鉄釉を施し、胎土は砂粒を含まない赤褐色を呈する。復元口径は30cm前後を測ると思われる。唐津系古窯跡群で生産されたものであろう。

脚皿

脚皿または小型の播鉢と思われるものが1点（第90図7）ある。底部中央部のみの破片であるため器形などは不明である。内面に塗り鉄を施し、外面はナデ調整のままである。胎土は砂粒を含まない橙灰色を呈する。近世のものであるが、生産地は不明である。

甕

甕は9点ある。口縁部の破片は1点（第89図2、図版第六一⑤）ある。頸部より水平に外反し、端部をつまみ出すようにして直立する。口縁下端で丸味を作り、直立した口縁端部をヨコナデ調整



第91図 坂ノ下中世墓群出土陶磁器片拓本図② (縮尺1/4)

する。内面は段を作り凹面を形成して端部へ至る。全体に黄褐色の釉を施し、内面と頸部外面には濃緑色の釉を施す。復元口径30.8cmを測る。丹波古窯跡群で生産されたものであろうか。

頸部の破片が1点(第91図1、図版第六二⑥⑥')ある。内外面ともにヨコナデ調整を行い、下半に指頭痕を残す。胎土は径1mm前後の白色粒子を含む赤褐色を呈する。越前古窯跡群で生産されたものであろう。9号墓東方の地輪(S17)下より出土した。

体部の破片は6点あり、生産地別に述べていく。越前古窯跡群で生産されたと思われる破片が2点(第91図2、図版第六二⑦⑦') (第91図3、図版第六二⑧⑧')あるが、体部下半の部分で同一個体の可能性がある。断面より4段の粘土帯が確認され、このつぎ目の内面に指頭痕を残す。下から2段の粘土帯を板状工具で軽く指ナデする。胎土は径1mm前後の白色粒子を多く含む赤褐色を呈する。常滑古窯跡群で生産されたと思われる破片は2点あり、格子状の刻印を有する(第90図5、図版第六一⑦)、またはその一部が残るもの(第90図6、図版第六一④)である。胎土は径1mm程度の白色粒子をごく少量含み、わずかに赤みがかった灰色を呈する。瀬美古窯址群で生産されたと思われる甕の破片は3点ある。鋤筒状もしくは格子目状の刻印を有す破片は2点(第90図2、図版第六一⑤)(第90図4、図版第六一⑨)あり、いずれも頸部の近くと思われる。胎土は径1mm以下の黒色粒子をわずかに含む灰色を呈する。二条の沈線有する破片(第90図3、図版第六一⑧)も頸部の近くと思われる。胎土は径1mm以下の黒色粒子を含む灰色を呈する。

壺

壺は9点ある。口縁端部を小さく折り返した壺は2点ある。越前古窯跡群で生産されたと思われ

る壺（第89図3、図版第六三②）は肩部が強く張ると思われる。肩部から直線的に頸部へ至る。頸部からやや外湾して立ち上り口縁部となる。口縁端部は横へすどく突出する。口縁端部より肩部の一部に緑色の釉を施す。胎土は径1mm前後の白色粒子を含み、赤褐色を呈する。復元口径10.0cmを測る。常滑古窯跡群で生産されたと思われる破片（第89図22、図版第六一①）は口縁端部に欠損するために詳細は不明であるが、前者より折り返しが大きいようである。内外面に薄い透明の釉を施し、胎土は径0.5mm前後の黒色粒子をごく少量含む灰色を呈する。復元口径11.2cmを測る。

口縁端部を折り返して丸くした壺は2点あり、ともに常滑古窯址群で生産されたものと思われる。全体に茶褐色、一部緑色の釉を施す壺（第89図20、図版第六一③）は径0.5mm以下の黒色粒子を多量に含む明灰色の胎土を呈する。復元口径10.8cmを測る。無釉の壺（第89図21、図版第六一②）は径0.5mm以下の黒色粒子を少量含む橙灰色の胎土を呈する。復元口径10.8cmを測る。壺肩部の破片は3点ある。瀬戸古窯址群で生産されたと思われる褐釉壺（第89図4、図版第六一⑧）は瓶子の可能性がある。頸部への立ち上り部で段を有し、段の下で垂弁をへら描きし、さらにその下に花文のスタンプを刻む。内面は頸部への絞り目を残し、頸部をヨコナデ調整する。胎土は砂粒を含まない暗灰色を呈する。復元径23.3cmを測る。

碗

碗は5点ある。青磁碗（第89図17、図版第六二①）は貼り付けの高台を有する。底部を除く内外面に淡い緑釉を施し、胎土は灰色を呈する。底部外面に漆と思われる黒色の付着がある。高台部復元径5.0cmを測る。鉄釉碗（第89図24、図版第六一⑥）は削り出しの高台を有する。釉は明るい茶褐色で胎土は砂粒を含まない暗灰色を呈する。底部復元径8.4cmを測る。大日茶碗は同一個体と思われる口縁部と底部がある（第89図25、図版第六一③）。底部からやや内湾気味に直立し、口縁部は折り返さず体部からそのまま口縁端部に至る。胎土は明るい灰色を呈する。復元口径12.0cm、復元器高6.8cm、底部復元径4.8cmを測る。白磁碗（第89図18、図版第六二⑨）は口縁端部に弱い稜を持つ。全面に乳白色の釉を施す。口径7.0cm、器高3.4cmを測る。染付碗（第89図19、図版第六二⑩）はほぼ完形である。乳白色の釉を施し、梅木の文様を描く。口径9.9cm、器高5.4cmを測る。

小皿

小皿は4点ある。白瓷系の小皿（第89図13、図版第六一⑫）は直線に開く体部下半から一度内湾して口縁端部に至る。胎土は径0.5mm前後の黒色粒子をごく少量含む灰色を呈する。復元口径10.0cmを測る。灰釉小皿（第89図14、図版第六一⑪）は口縁部内面に段を作って面を有する。緑色を帯びた釉を内面と口縁部外面に施す。口縁復元径11.2cmを測る。灰釉磁器（第89図15、図版第六一⑬）は底部をややくぼませ、内湾しながら口縁に至る。透明な釉を内面に施し、外面は露胎して少量の煤が付着する。胎土は明灰色を呈する。復元口径10.1cmを測る。平底の灰釉陶器小皿（第89図16、図版第六一⑪）は直線に開いた体部よりわずかに外反して口縁端部に至る。口縁端部の1ヶ所に小さな粘土を円盤状に貼り付ける。透明な釉を内面と口縁部に施し、露胎した体部外面に煤が付着する。胎土は乳白色を呈する。口径10.1cm、器高2.1cmを測る。

香炉

青磁香炉と思われる破片（第89図10、図版第六一⑩）がある。体部外面に深い青緑色の釉を厚く施す。胎土は暗灰色を呈する。体部復元径18.0cmを測る。

経筒・経筒蓋

経塚に関係する遺物が2点ある。いずれも瀬美古窯址群で生産されたものであろう。経筒身（第89図9、図版第六一⑩⑪）は口縁部の破片が2点あり、同一個体と思われる。体部よりやや内湾して口縁部へ至ると思われる。口縁部が水平な平坦面をもち、口縁部内面には指押さえを残す。口縁より2cmほど下の外面には焼成後、沈線を1条横に巡らす。胎土は明るい赤褐色を呈し、無釉である。口縁復元径16.8cmを測る。経筒蓋（第89図8、図版第六三③③'）は完形に近い。平坦な上面からわずかに外湾気味に口縁部へ至り、端部を丸くおさめる。内外面ともにロク口調整を行い、天井部内部をナデ調整、外面は未調整である。胎土は径1mm前後の白色・赤色粒子を含み明るい赤褐色を呈する。口径20.4cm、器高4.4cmを測る。ちなみに中世墓の下層で検出された経塚は、石などの状況から破壊されたものとは考えられない。ここで図化した経筒蓋はほぼ完形に近かったが、経筒は口縁部のみである。これらの経筒と経筒蓋の存在から、本調査で確認された2基以外に破壊された経塚がまだ付近にあるものと思われる。

徳利

徳利が1点（第92図、図版第六二⑪）ある。丸味をおびた体部から、細長く首がのびて口縁部へ至る。口縁は軽く外反し、端部を丸くおさめる。口縁から頸部中ほどまで鉄釉を施し、体部の一部へも散る。体部は灰釉を施し、濃緑色を呈する。体部上位に、長石釉のハケ目を横方向に施す。胎土は明灰褐色を呈する。口径5.3cm、底径6.8cm、器高20.6cmを測る。瀬戸古窯跡群で生産されたものか。

その他（土製品）

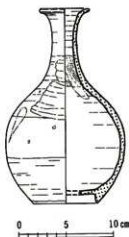
土製の火鉢の把手と思われる部分（第93図、図版第六四⑫）が出土している。

獅子の頭の顔を模したものであろう。口に位置する部分に孔があり、金属の輪をはめ込んだと思われる。

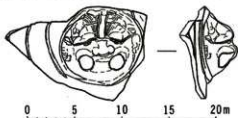
胎土は灰色の瓦質で、表面は黒色に焼されている。

第3節 土師質土器

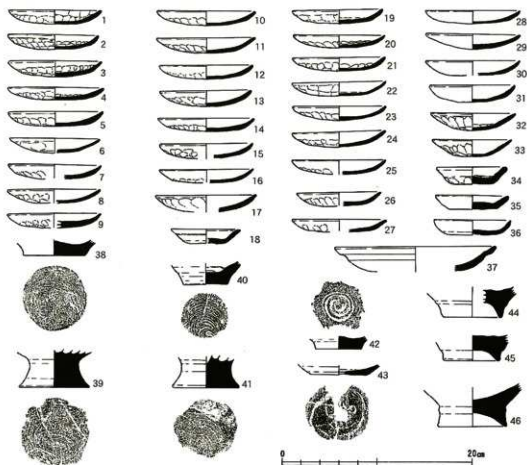
土師質土器はその多くが表土よりの出土であり、細片が多い。ここでは全形がわかるもの、遺



第92図 坂ノ下中世墓群出土近世陶磁器実測図（縮尺1/4）



第93図 坂ノ下中世墓群出土土製品実測図（縮尺1/4）



第94図 坂ノ下中世墓群出土土師器実測図（縮尺1/4）

構に伴うものを中心とした48点について述べる。

土師質小皿

土師質小皿は38点ある。ここでは形態、調整の違いから7類に分けた。以上これに従って説明する。A～F類は非ロクロ系土師器、G類のみロクロ系土師器である。

A類（第94図1～17、19、20、図版第六四①～⑥・⑧～⑬）

最も点数が多い種類である。底部と口縁部の境が明確ではなく、丸味のある底部からゆるやかに立ち上る。底部から口縁部へ立ち上る部分を特に厚めに作る。口縁端部は丸く終わるものと、次第に薄くなって終わるものがある。指頭で押さえて成形し、口縁部内外面をヨコナデ調整、見込みは不定方向のナデ調整である。内外面に煤の付着が見られるが、その範囲、量ともに一定していない。胎土は橙色または乳白色を呈する2種類ある。口径は11.1cm～9.8cm、器高は3.1cm～2.8cmを測る。

B類（第94図21～31、図版第六四⑮～⑲）

成形、調整ともにA類と同じであるが、器壁全体が薄手の作りとなっているためA類とは別にし

た。胎土、大きさともにA類と大きく相違することはない。

C類 (第94図32・33、図版第六四⑦⑧)

口径に比して小さめの底部から直線的に立ち上り口縁部へ至る。調整は摩耗が激しいため詳細は不明であるが、ヨコナデ調整と思われる。水簾した白粘土を用いて、乳白色の胎土を呈する。それぞれ口径9.0cm、器高2.0cm (32)と口径8.7cm、器高8.7cm、器高1.8cm (33)を測る。

D類 (第94図34・35、図版第六四⑩⑪)

全体に厚手の作りである。ヨコナデなどの調整は見られない。胎土は径1mmほどの黑色粒子を含む橙褐色を呈する。それぞれ口径7.6cm、器高2.1cm (34)と口径7.5cm、器高1.7cm(35)を測る。

E類 (第94図18・36、図版第六四⑨⑫)

手づくねで成形したあと、口縁外面1cmほどと、内面は見込中央を少し残した位置までをヨコナデ調整する。胎土は径1mm以下の黑色粒子を含む橙褐色を呈する。それぞれ復元口径7.4cm (18)と8.1cm(36)を測る。

F類 (第94図43、図版第六三⑬)

回転ヘラキリの底部が1点あるが、器形などは不明である。底部中央に直径1.0cmほどの孔がある。穿孔は焼成前か後のどちらでなされたかわからない。胎土は径1cm前後の黑色粒子を多量に含む、乳白色を呈する。底部径6.2cmを測る。

G類 (第94図38、図版第六三⑭)

A～F類までのものとは異なりロクロ成形による浅皿の底部と思われる。底部外面は回転糸切り、内面はナデ調整である。胎土は径1mm前後の黑色粒子を多量に含む橙褐色を呈する。底部径6.8cmを測る。

上師質中皿

底部を欠くものの、おそらく底部から屈折せず丸く立ち上ると思われる (第94図37、図版第六三⑩)。見込の立ち上りから口縁部外面までヨコナデ調整する。この調整で見込に弱い段、外面にやや強めの段を設ける。胎土は径1mm前後の白色粒子を少量含む橙褐色を呈する。復元口径17.1cmを測る。

柱状高台皿・碗

平坦な底部から内湾しながらくびれ立ち上る中実の脚が2点ある (第94図39・41、図版第六三⑥⑦)。立ち上って外反する部分より上半を欠失するため全体の器形は不明である。底部は回転糸切りである。1点 (第94図41) は脚内面に円錐状のくぼみを持つ。胎土は径1mm前後の黑色粒子を多量に含む橙褐色を呈する。それぞれ底部径7.2cmと7.6cmを測る。

高台付皿・碗

底部のみの破片であるが高台を持つ碗になると思われるものが3点ある(第94図44・45・46、図版第六三⑦⑧⑨)。高台は削り出して作られ、わずかに「ハ」の字状に開く。

器種不明品

厚手の底部から一度上方へ立ち上がった後に開く器形(第94図40・42、図版第六三⑫⑬)であり、柱状高台皿・碗の範疇に含まれる可能性もある。底部外面は回転糸切り、内面はナデ調整である。

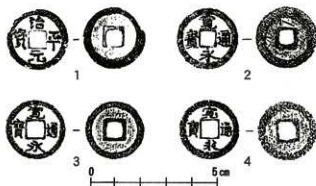
胎上は径1mm前後の黑色粒子を少量含む淡褐色を呈する。底部径4.3cm～4.8cmを測る。

第4節 金属製品

金属製品には銭貨、懸仏、短刀などがある。

銭貨

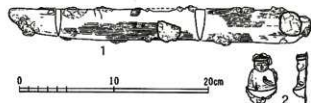
銭貨は5点あり、1点は遺存状態が悪く銘の判断もつかなかったため、ここでは省略する。省略した1点も含めて、5点とも表土よりの出土である。寛永通貨が3点ある。それぞれ直径2.40cm、重量4.2g（第95図2、図版第六四②③'）、直径2.3cm、重量3.7g（第95図3、図版第六四②③'）、直径2.4cm、重量3.1g（第95図4、図版第六四②③'）を測る。初鑄は1636年である。北宗銭の治平元宝が1点（第95図1、図版第六四②③'）ある。銘は左回りに読む。直径2.4cm、重量3.6gを測る。初鑄は1064年である。



第95図 坂ノ下中世墓群出土銭貨拓本図（縮尺2/3）

短刀

短刀は1振りある（第96図1、図版第六四④）。本遺跡の中世墓において唯一副葬品と考えられ遺物である。出土時点では半分に折れていたが、ほぼ完形に復元できた。刃の位置が明確でなく、身と茎の境は明確ではない。全長32.2cm、最大幅3.2cm、基部に近いところで最大の厚さ1.1cmを測る。重さは116.5gを量る。



第96図 坂ノ下中世墓群出土短刀・掛仏（部分）実測図（縮尺1/4）

懸仏

銅鑄製の菩薩像懸仏は1点（第96図2、図版第六四④'）ある。出土時点では金箔がわずかに残っていたので金銅製であったと思われる。背面に薄い銅板を接合するが、遺存状態が悪く尊像の周囲のみにしか残存していなかったため、本来の形状は不明である。天冠台の周囲に縦の刻みを入れる。頂部は髪を束ねるような表現をする。右手は与願印をとり、左手は腹部に置く。尊像の上下端にそれぞれ径1mm弱の孔を有する。像高4.7cm、幅0.5cm、厚さは尊像部分が1mm、背面の銅板が0.5mmを測る。重さは5.6gを量る。おそらく木の板に貼り付けられていたものであろう。

第5節 石造物

中世墓に特徴である石造物については五輪塔・板碑・石仏など216点も出土している。もちろん石製であるため完全な形のものが多く、なかには割れたり、風化が著しかったりして本来の形状を特定できないものもあった。ここでは五輪塔、五輪塔を所刻する五輪塔板碑、如来坐像を所刻する如来坐像板碑、火山礫凝灰岩製板碑、そして石仏の5種類に分けて説明する。

(1) 五輪塔

五輪塔はすべて組み合わせ式のもので、一石五輪塔は1基も存在しない。空風輪と火輪が一体になった空風火輪と呼称すべきものが1基ある以外は、空風輪・火輪・水輪・地輪の4部分にわかれている。A～D各群で出土しているが、個々の部分が点在して出土しており、当初の組み合わせが不明のものが多い。また原位置、もしくは原位置に近いと思われる五輪塔は地輪部分のみが多い。石材はそのほとんどが花崗岩であり、遺存状態はあまり良くない。

以下、空風輪・火輪・水輪・地輪の順にそれぞれについてまとめて記述する。

空風輪（第97～99図、図版第六Ⅱ・六六・七一）

空風輪はA群7基、B群12基、C群1基、D群25基の計45基を数える。石材は1基（S85）が凝灰岩であるほかはすべて花崗岩である。頂部と下面の突起を欠損している個体が多い。

以下、全形が不明な4基（S66、S117、S194、S211、S215）を除いた41基の空風輪について、下面突起部を除いた空風輪の器高に対する空輪部と風輪部の間のくびれ部径の比率を参考とし（第10表）、Ⅰ～Ⅳの4類に分類した。

Ⅰ類 器高に対してくびれ部径が60%以下の比率となり、空輪部と風輪部の個々が独立して見えるもの。頂部の突起が明瞭である。15基を数える（S23、S29、S40、S43、S44、S45、S73、S85、S87、S113、S134、S159、S172、S188、S191）。

Ⅱ類 器高に対してくびれ部径が60%前後の比率となり、空輪部と風輪部の境が明瞭なもの。概して、頂部の突起はⅠ類ほど明瞭ではない。21基を数える（S7、S9、S14、S21、S26・27、S28、S30、S31、S36、S37、S38、S39、S51、S74、S96、S108、S143、S146、S165、S199、S208）。

Ⅲ類 器高に対してくびれ部径が大きく、65%以上の比率となるもの。空輪部と風輪部の間の幅を狭く掘ってくびれ部を造る。頂部の突起はわずかに意識するだけの造りである。4基を数える（S112、S145、S162、S192）。

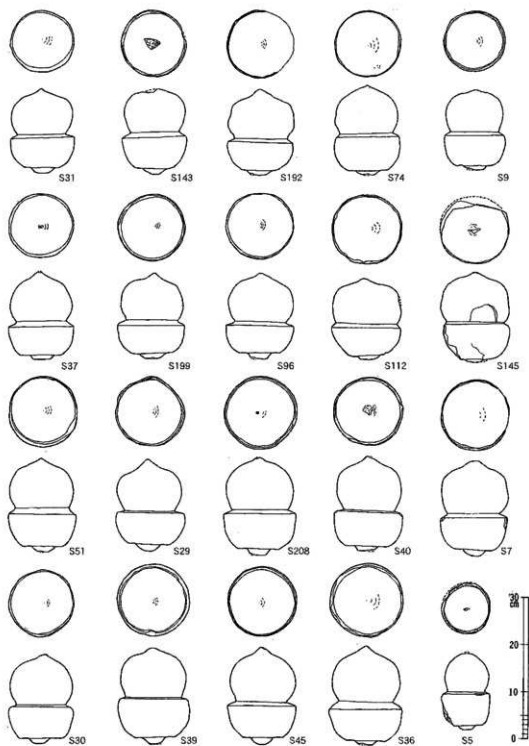
Ⅳ類 空輪部、風輪部径に対してはくびれ部の径が小さくないが、器高に対してのくびれ部径の比率が小さいもの。全体に細長い形態を呈する。本中世墓群出土の空風輪のなかで異質であり、1基を数えるのみである。（S5）

火輪（第100～102図、図版第六七・七一）

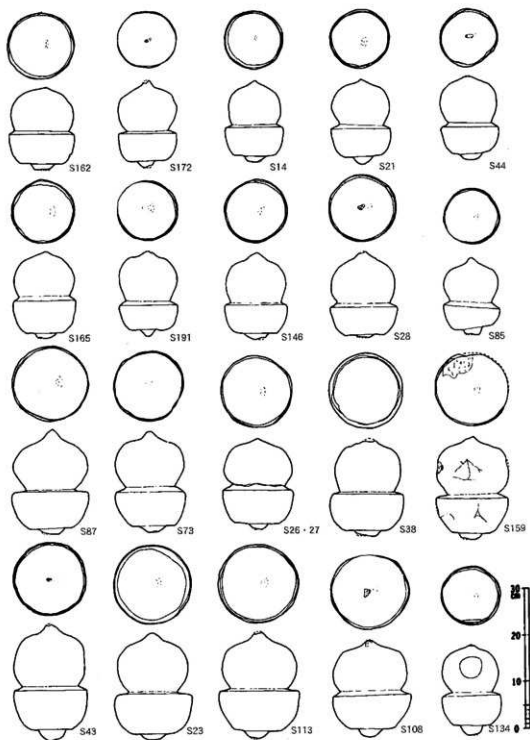
火輪はA群3基、B群2基、C群5基、D群15基の計25基あり、うちA群の1基（S22）は空風火輪である。石材は1基（S82）が凝灰岩であるほかはすべて花崗岩である。

以下、軒反りの形態から3類に分類した。

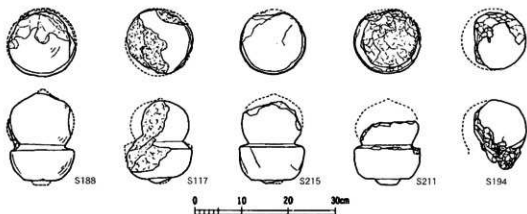
Ⅰ類 軒端をほぼ直線に造り、軒先もわずかに反る程度のもの。10基を数える（S32、S33、S49、



第97図 坂ノ下中世墓群出土空風輪実測図① (縮尺1/8)



第98図 坂ノ下中世墓群出土空風輪実測図② (縮尺1/8)



第99図 坂ノ下中世墓群出土空風輪実測図③ (縮尺1/8)

S54、S56、S59、S61、S69、S105、S150)。なかには器高が低く扁平な形態を呈するものもある (S61、S150)。また1基だけある空風火輪 (S22) も火輪部分の形態より、ここに属する。ちなみにこの空風火輪は笠塔婆の可能性もあるが、本調査ではその軸部は確認していない。

Ⅱ類 軒端を全体に反らせて曲線となり、軒先の反りをやや強く造るもの。8基を数える (S24、S53、S80、S92、S95、S100、S111、S198)。

Ⅲ類 軒端を全体に反らせて、さらに軒先を跳ね上げるようにして上方に反らすもの。5基を数える (S82、S88、S139、S157、S170)。

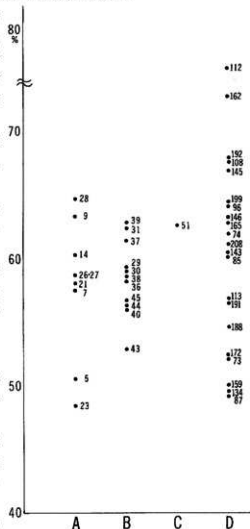
大きさはそれぞれの形態とも幅25cm前後、器高13.4cm前後を中心として、大きな差はない。Ⅲ類に属する2基 (S82、S170) が幅の割には器高が高いのは注目される。

水輪 (第103～105図、図版第六八・七)

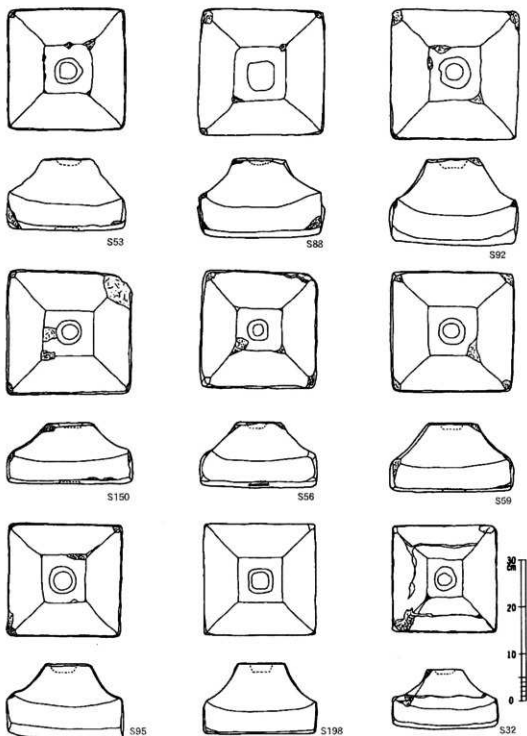
水輪はA群3基、B群3基、C群2基、D群15基の計23基を数える。石材は1基 (S83) が凝灰岩であるほかはすべて花崗岩である。

全形の不明な3基 (S6、S151、S174) を除いた20基について、水輪の最大径が器高のどの部分に位直するか、数値によって算出した (第11表)。以下、これにより4類に分類した。

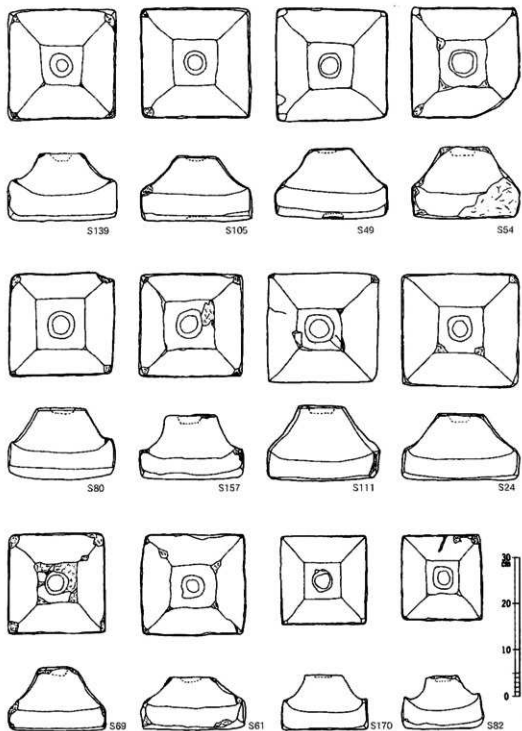
Ⅰ類 最大径が下面より50%前後、つまり器高の中



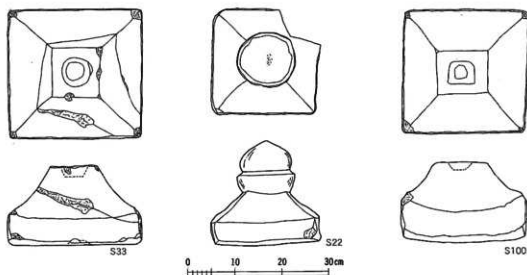
第10表 坂ノ下中世墓群出土空風輪各部位比率グラフ



第100図 坂ノ下中世墓群出土火輪実測図① (縮尺1/8)



第101図 坂ノ下中世墓群出土火輪実測図② (縮尺1/8)



第102図 坂ノ下中世墓群出土空風火輪・火輪実測図（縮尺1/8）

位に位置するもの。2基を数える（S11、S41）。

Ⅱ類 最大径が下面より51%～55%の間、つまり器高の中心よりほんのわずかに上方に位置するもの。11基を数える（S25、S34、S42、S52、S75、S97、S103、S110、S114、S189、S209）。

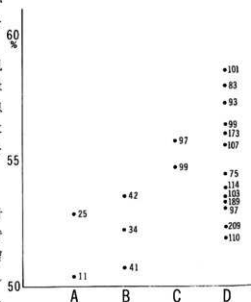
Ⅲ類 最大径が下面より55%～57%間、つまり器高の中心よりあきらかに上方に位置するもの。4基を数える（S58、S99、S107、S173）。

Ⅳ類 最大径が下面より57%以上に位置し、上位が大きく膨らみ下位の狭まりが強調されるもの。3基を数える（S83、S93、S101）。

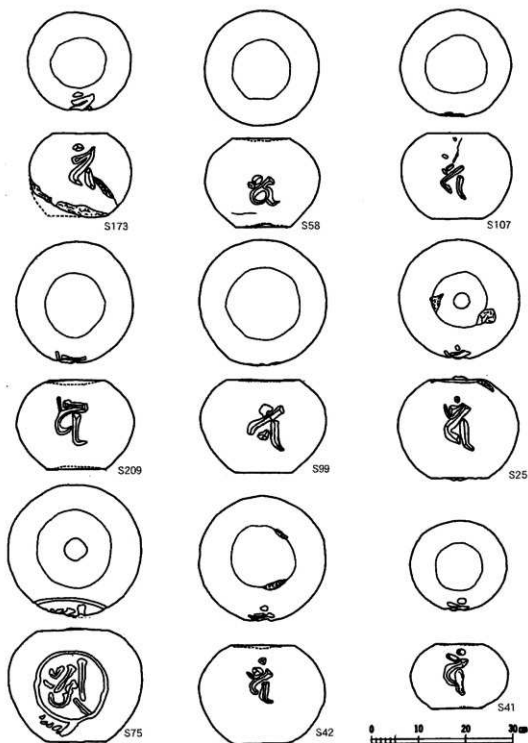
上面と下面に突起を持つものはⅠ・Ⅱ類にのみ見られる。一方、突起を持たないⅠ・Ⅱ類については上面と下面をわずかに窪ませて安定をよくしたと思われる痕跡がある。またⅠ～Ⅲ類はいずれも側面に梵字を刻むのに対して、Ⅳ類の3基については梵字を刻まない。

地輪（第105～109図、図版第六九・七〇・七一）

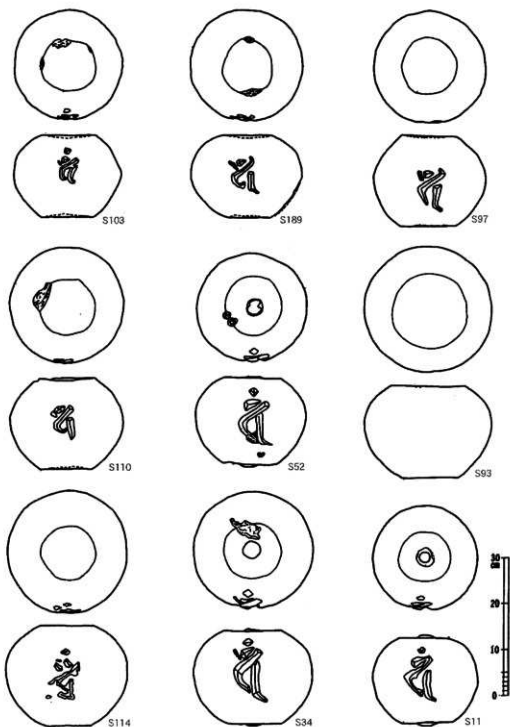
地輪はA群10基、B群1基、C群5基、D群21基の計37基を数える。石材は2基（S84、S169）が凝灰岩であるほかはすべて花崗岩である。地輪は原位置を留めるとされるものが多く、本中世墓各群に共通した遺物である。そこで、地輪高が地輪幅に対して、何割の比率となるかを数値で算出した（第12表）。しかし、数値が全体に均等に広がり、火輪や水輪のよ



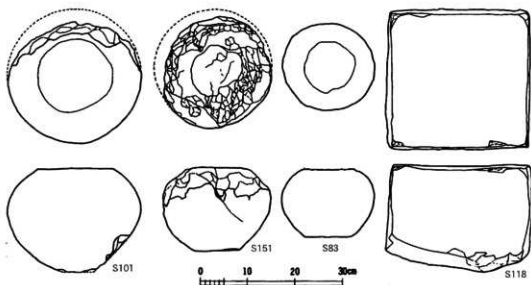
第11表 坂ノ下中世墓群出土水輪各部位比率グラフ



第103圖 坂ノ下中世墓群出土水輪実測図① (縮尺1/8)



第104図 坂ノ下中世墓群出土水輪実測図② (縮尺1/8)



第105図 坂ノ下中世墓群出土水輪・地輪実測図③（縮尺1/8）

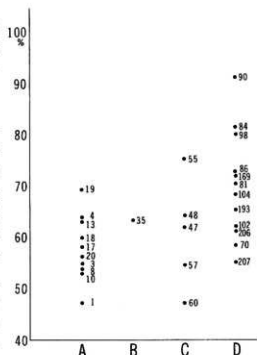
うに分類することはできなかった。ただ、A・B・C群出土のものが地輪幅に対して薄く、D群出土のものは相対的に厚手のものが多くなるとは言える。

(2) 板碑

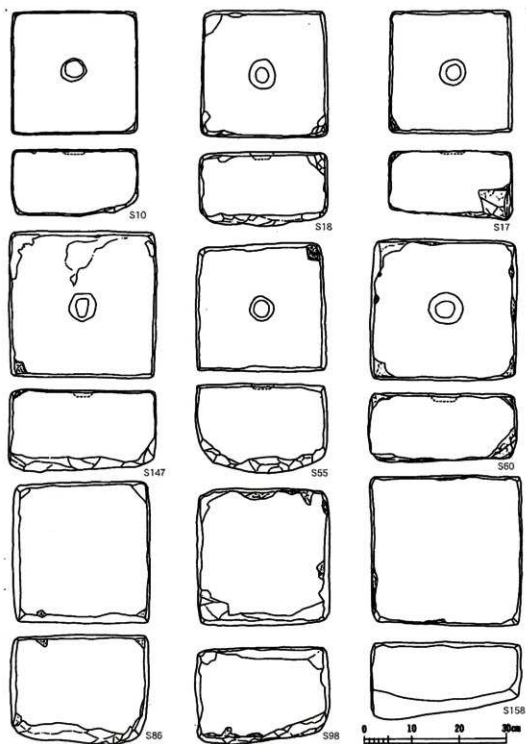
板碑は五輪塔板碑と如来座像板碑の石材が（斑晶質）安山岩で、そしてこれらと形態・石材が異なる火山礫凝灰岩製板碑と花崗岩製の石仏もここに含めて記述する。

五輪塔板碑

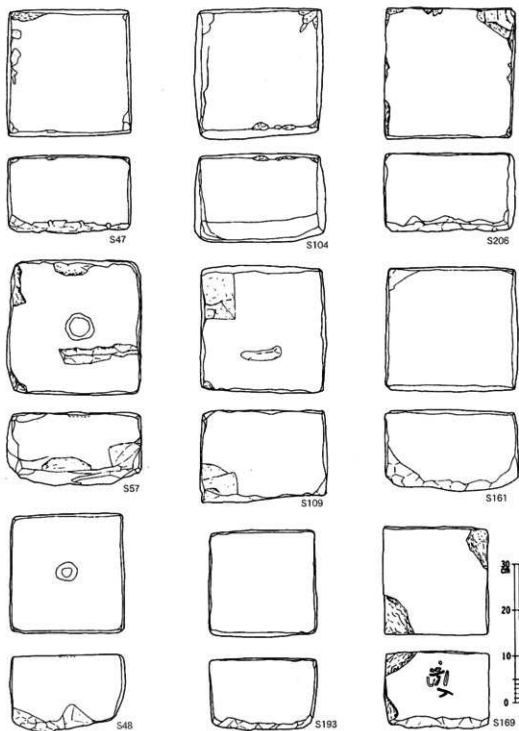
五輪塔板碑は長方形の原石の一端を削り落として三角形の頂部を造り、図像を刻む碑面を一段掘り下げて頂部と基部より低くするいわゆる畿内型の板碑である。これらは五輪塔2基を刻む双塔式五輪塔板碑と、五輪塔1基のみを刻む単塔式五輪塔板碑がある。単塔式五輪塔板碑は36基、双塔式五輪塔板碑は6基ある。単塔式五輪塔板碑と双塔式五輪塔板碑の間に形態的特徴の違いは見られないため、両者を同じ基準で分類した(第105～107)。これらのうち五輪塔内に梵字を刻むものは5基ある。しかし、特定の種類にのみ刻まれることはない。刻まれる梵字は空輪に「ア」、風輪に「バ」、火輪に「ラ」、水輪に「カ」、地輪に「キャ」である（第126図）。



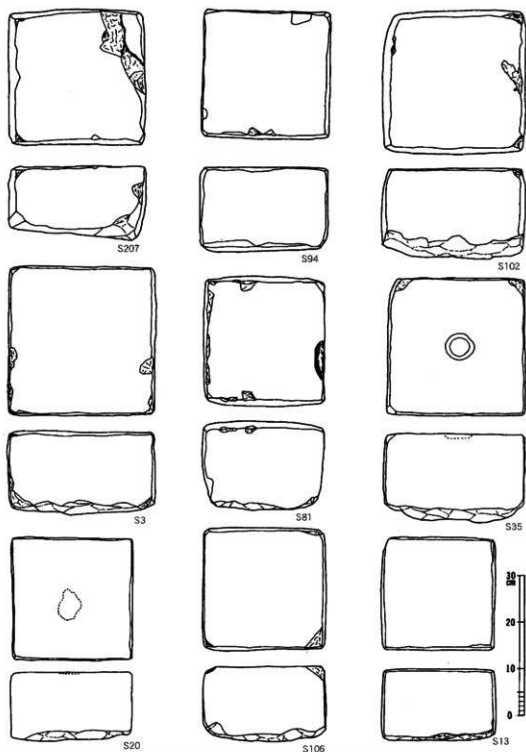
第12表 坂ノ下中世墓群出土地輪各部位比率グラフ



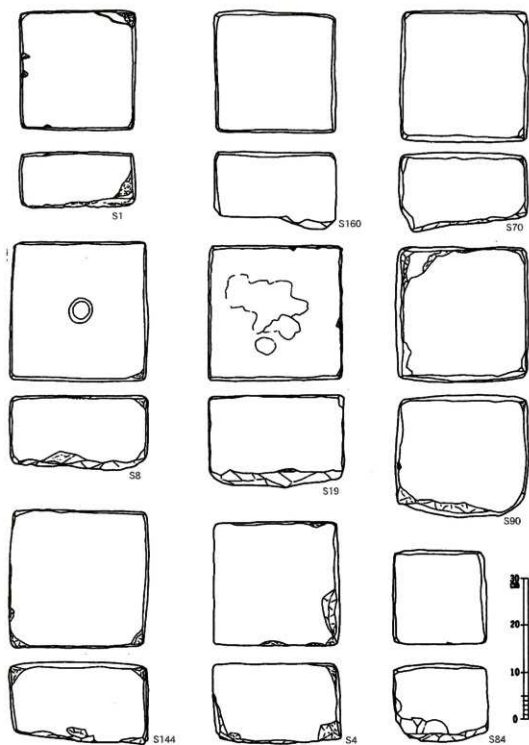
第106図 坂ノ下中世墓群出土地輪実測図① (縮尺1/8)



第107圖 坂ノ下中世墓群出土地輪実測図② (縮尺1/8)



第108図 坂ノ下中世墓群出土地輪実測図③ (縮尺1/8)



第109圖 坂ノ下中世墓群出土地輪実測図④ (縮尺1/8)

まず分類についての項目を述べる。

I 類 碑面の周囲に額を有するもの。

II 類 碑面の五輪塔を所刻する際に周囲を彫り残した結果が額状になるもの。I 類の額を意識したものの。

III 類 碑面の五輪塔を線刻するもの。

IV 類 五輪塔の周囲に彫り残しを残さず、五輪塔が碑面より浮かび上がるようになるもの。

a 類 板碑頂部に一本の条線を所刻するもの。

b 類 板碑頂部に条線を所刻しないもの。

上記以外の小分類については文中にて説明する。

I a1 類 (第110図)

碑面の周囲に額を有し、頂部に一本の条線を刻み、そして五輪塔の下に蓮台を表現するもの。単塔式五輪塔板碑が5基ある (S141、S154、S156)。頂部を欠失するが、ここに含まれると思われる単塔式五輪塔板碑も2基ある (S163、S186・210)。双塔式五輪塔板碑はない。

I a2 類 (第110図)

碑面の周囲に額を有し、頂部に一本の条線を刻むが、五輪塔の下に蓮台を表現しないもの。単塔式五輪塔板碑は3基ある (S64、S127、S176)。また上部を欠失するため、ここか、次に述べる I b 類に含まれると思われる単塔式五輪塔板碑も3基ある (S136、S148、S164)。双塔式五輪塔板碑は1基ある (S137・138)。

I b 類 (第110図)

碑面の周囲に額を有するが、頂部に条線を刻まないもの。単塔式五輪塔板碑が2基ある (S79、S212)。また下半部を欠失するが、ここに含まれると思われるものも1基ある (S132)。双塔式五輪塔板碑はない。

II b1 類 (第111図)

碑面の周囲に額を有さないが、五輪塔を所刻する際に周囲を額状に彫り残すもの。額を意識して制作されたものか。頂部に条線を刻まない。単塔式五輪塔板碑が3基ある (S175、S185、S216)。双塔式五輪塔板碑はない。

II b2 類 (第111図)

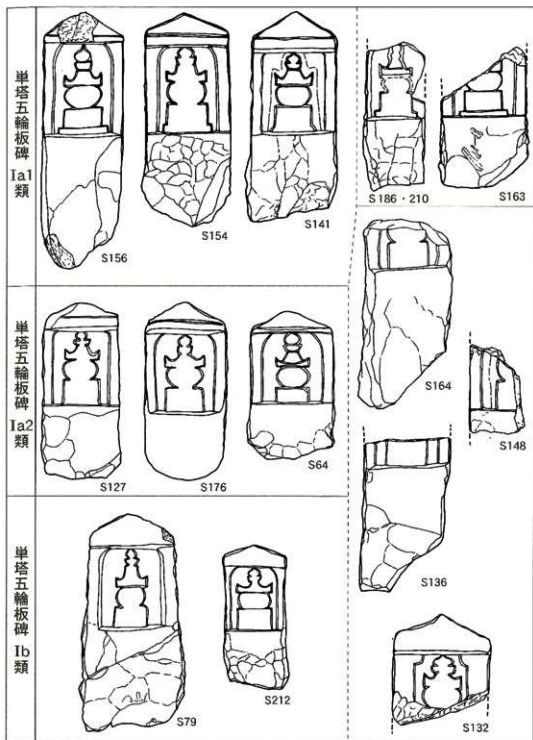
碑面の周囲に額を有さないが、五輪塔を所刻する際に五輪塔に沿った範囲のみ彫り、周囲を彫り残すもの。II b1 類とは異なり、額を意識しないものか。頂部に条線を刻まない。単塔式五輪塔板碑は8基ある (S67、S77、S89、S133、S140、S153、S202、S214)。双塔式五輪塔板碑は3基ある (S116、S168、S201)。

大きくはb類に含まれるが、やや異なるものとして次の2種類がある。

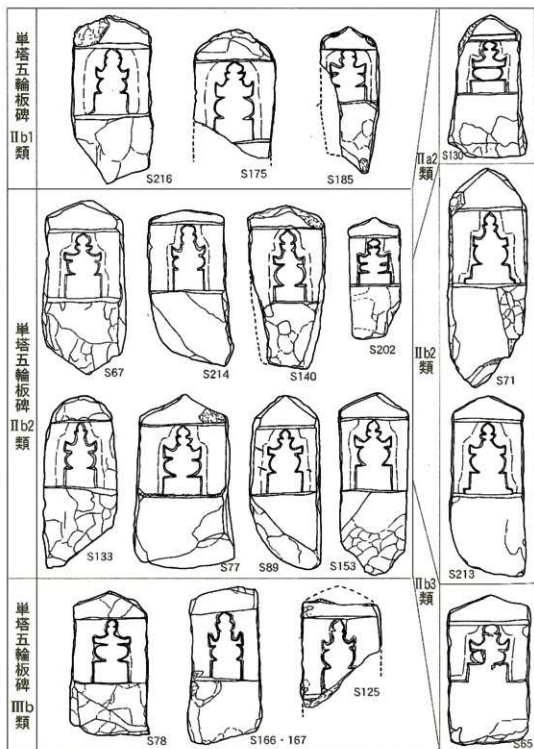
II b2' 類 (第111図)

基本的にはII b2 類に含まれるが、五輪塔の下に蓮台を表現するもの。頂部に条線は刻まない。単塔式五輪塔板碑が2基ある (S71、S213)。双塔式五輪塔板碑はない。

II b3 類 (第111図)



第110圖 板ノ下中世墓群出土板碑分類案①



第111図 坂ノ下中世墓群出土板碑分類案②

基本的にはⅡb2類に含まれるが、碑面の五輪塔と基部の間に段を有さないもの。単塔式五輪塔板碑が1基ある（S65）。双塔式五輪塔板碑はない。

またⅡb2類の例外としてⅡa2類がある。

Ⅱa2類（第111図）

碑面はⅡb2類と同じだが、頂部に一本の条線を刻むもの。単塔式五輪塔板碑が1基ある（S130）。双塔式五輪塔板碑は1基ある（S200）。

Ⅲb類（第111図）

五輪塔を線刻によって表現するもの。単塔式五輪塔板碑は3基ある（S78、S166・167、S125）。双塔式五輪塔板碑は1基ある（S124）。

Ⅳa類（第112図）

五輪塔の周囲に彫り残しを残さず、五輪塔のみが碑面より浮かび上がるもの。頂部に一本の条線を刻む。単塔式五輪塔板碑が1基ある（S123）。双塔式五輪塔板碑はない。

Ⅳb類（第112図）

基本的にはⅣa類と同じだが頂部に条線を刻まない。単塔式五輪塔板碑が1基ある（S195）。双塔式五輪塔板碑はない。

Ⅳb4類（第112図）

他の板碑のように碑面より基部が突出せず、五輪塔が図案より完全に浮かび上がるもの。頂部に条線を刻まない。単塔式五輪塔板碑が1基ある（S177）。双塔式五輪塔板碑はない。

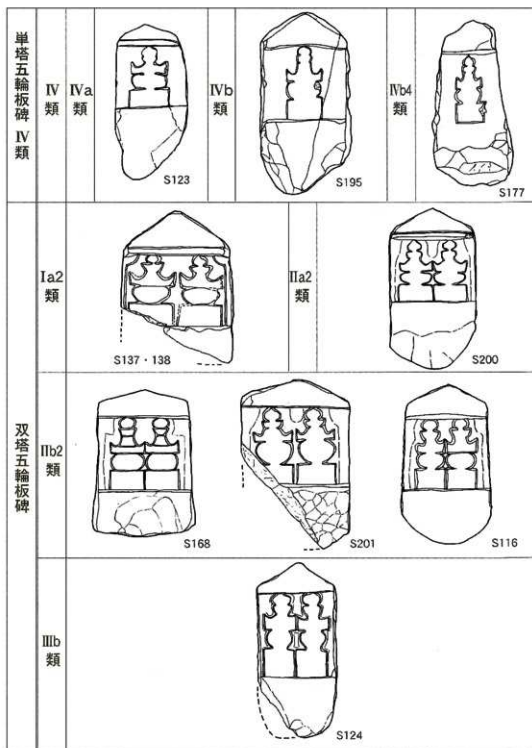
如来座像板碑（第120、121図）

如来座像板碑は6基ある。板碑の形態は五輪塔板碑と同じくし、図像として定印を結んだ阿彌陀如来座像を肉厚に刻む。額を有するもの（S126）と額を有さないもの（S68、S72、S181、S187）、そして板碑の縁より中央に彫り窪めて如来座像を刻むもの（S182）の3種類がある。

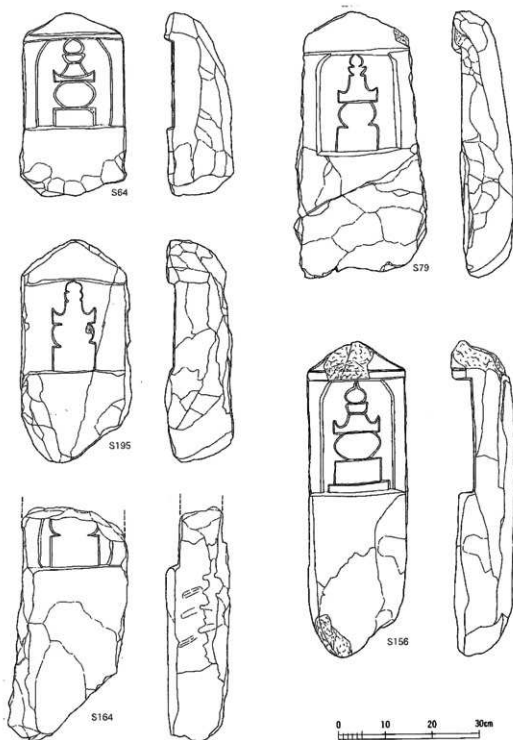
火山礫凝灰岩製板碑（第120、121図）

前述した五輪塔板碑と形態・石質ともに異なる火山礫凝灰岩製板碑は4基ある。形態は頭部を山形にする長方形を呈し、縁に幅3cm前後の額をめぐらす。いずれも厚さは五輪塔板碑より薄めである。石質は足羽山付近（現在の福井市内に位置する。）で産出する笏谷石（注）と呼ばれる火山礫凝灰岩である。

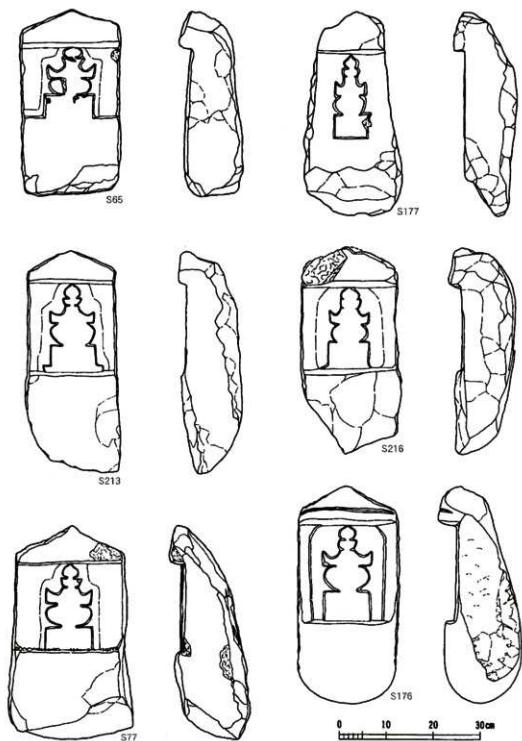
4基ある火山礫凝灰岩製板碑のうち完形に復元できたものは1基（S178・179・180・183・184）のみであるが、他の3基とも大きさ、形態についてはほぼ同じと考えられる。調整は正面と山形を呈する上面、内側面を平滑し、裏面と底面は丸鑿の跡を残す。碑面周囲の額には割り付け線を残す部分がある。基部を残す3基のうち2基は底面付近を裏面にやや突起させる（S128・149、S115・142・171）。もう1基は板碑の中段から次第に厚みを増して、底面を一番厚くする（S178・179・180・183・184）。碑面に文字のみを線刻するものは前述の1基で、破片で出土したがほぼ完形に復元できた（S178・179・180・183・184）。中央の上より「キヤ」「カ」「バ」「ア」の梵字を刻み、続いて「為妙徳禪尼」の文字を刻む。その右側には「天文十六年」の、左側には「十月四日」の文字を刻む。碑面に五輪塔2基を線刻すると思われるのは2基ある。1基は碑面の水輪中ほどより上



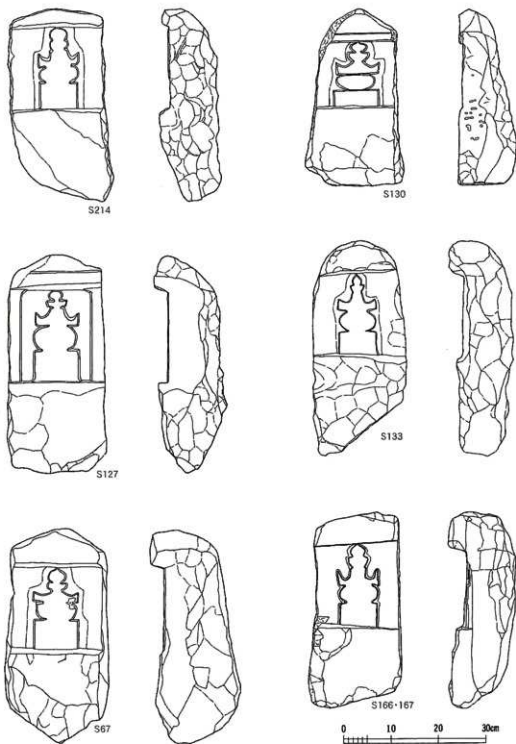
第112図 坂ノ下中世墓群出土板碑分類案③



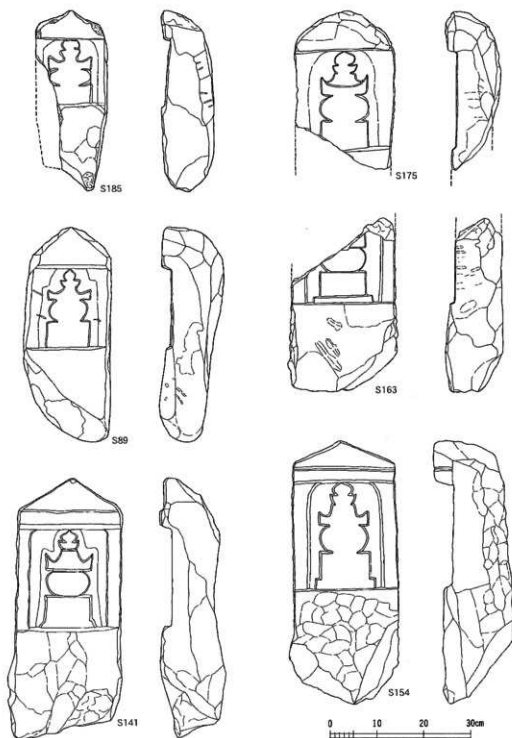
第113図 坂ノ下中世墓群出土板碑実測図① (縮尺1/8)



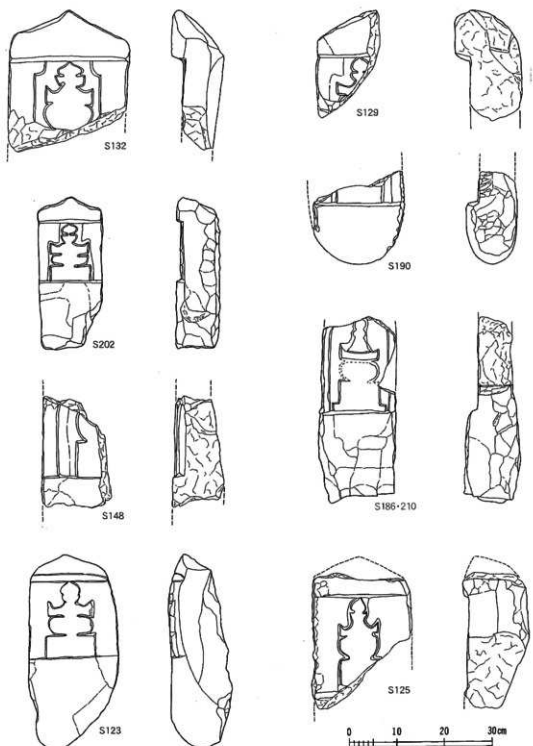
第114図 坂ノ下中世墓群出土石板実測図② (縮尺1/8)



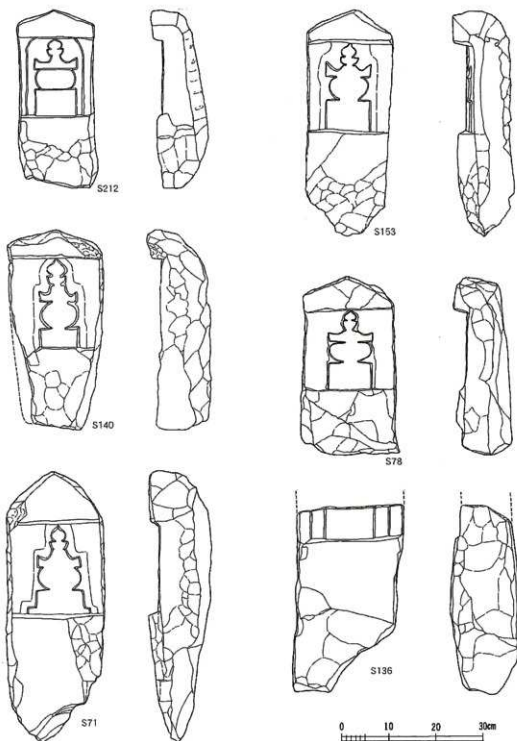
第115図 坂ノ下中世墓群出土板碑実測図③ (縮尺1/8)



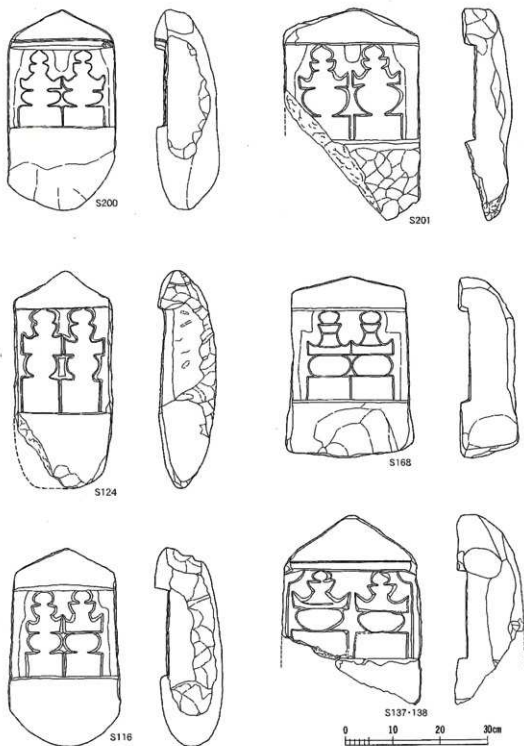
第116図 板ノ下中世墓群出土板碑実測図④ (縮尺1/8)



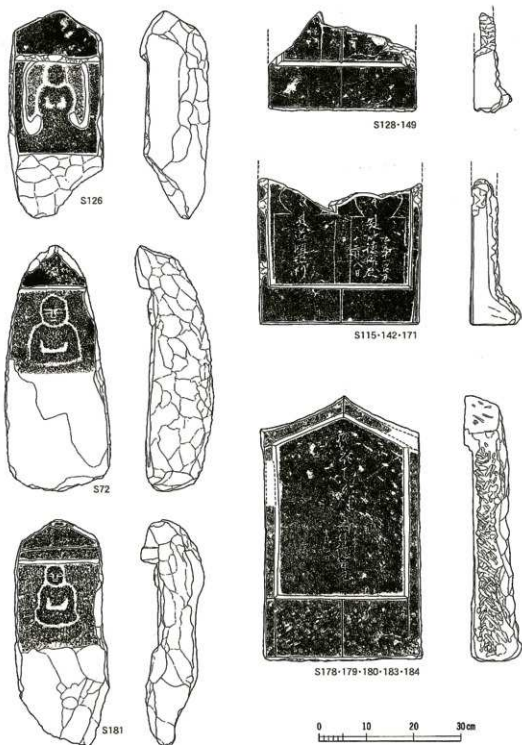
第117図 坂ノ下中世墓群出土板碑実測図⑤ (縮尺1/8)



第118図 坂ノ下中世墓群出土石板碑実測図⑥ (縮尺1/8)



第119図 板ノ下中世墓群出土板碑実測図⑦ (縮尺1/8)



第120図 坂ノ下中世墓群出土板碑実測図⑧ (縮尺1/8)

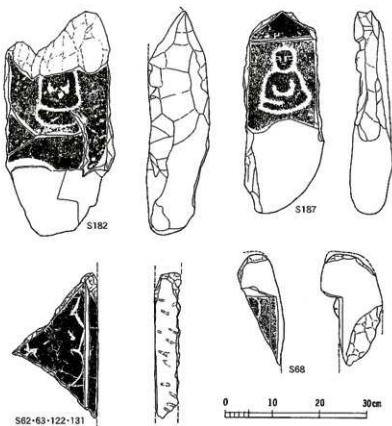
半部を欠失する (S S115・142・171)。右の地輪中央に「ア」の梵字に続けて「徳禪尼」の線刻された文字を残す。その右側に「正?十一癸未」、左側に「十二月八日」の線刻された文字を残す。左の地輪中央に「ア」の梵字に続けて「道?禪門」の線刻された文字を残すが、その両側には何にも線刻されていない。ここでは年号と思われる「正?十一癸未」が、いつになるかが問題になる。火山礫凝灰岩製板碑の生産が越前でも増大する中世後半以降で、元号に「正」がついて最低11年まで続き、なおかつ11年の下支が癸未である年は天正11年(1583)のみである。

碑面の風輪から地輪にかけての部分であるが、小片のため全形は不明のものが1基ある (S61・62・122・131)。火輪と水輪の間に「水」の線刻された文字を残すのみで、他は欠失して不明である。

上部はほとんど欠失し、基部付近のみ残存するものが1基ある (S128・149)。碑面中央に縦線を線刻し、碑面を左右に区画する。区画の右中央に「尼」の線刻された文字を残し、その両側にも文字らしきものが線刻されているが判読できない。区画の左中央には「禪門」の線刻された文字を残すが、この両側には線刻がない。

石仏

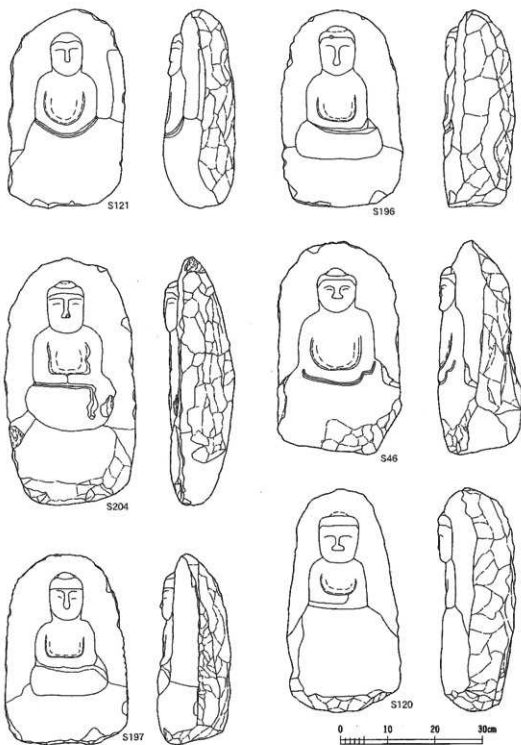
石仏は18基ある。花崗岩の自然石に近い石材(その多くは河原石か)を利用したもので、板碑とは異なるため、ここでは石仏と呼称する。いずれも定印を結んだ阿弥陀如来座像を刻む。これら18基の石仏は、座像を刻む面(板碑の碑面にあたる部分)の横断面が水平に近いもの6基 (S12、S16、S76、S135、S196、S264)と曲線をなすもの (S15、S46、S50、S91、S119、S120、S121、S152、S155、S197、S203、S205)との2種類に分かれるようであるが、厳密にはその差はほとんどない



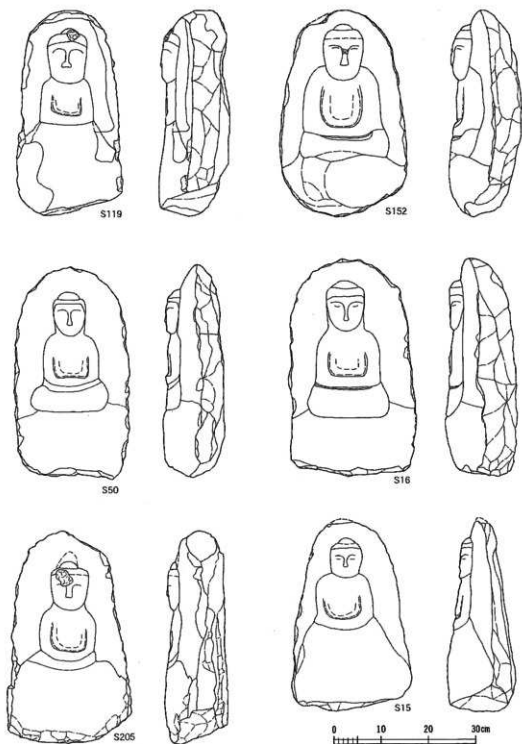
第121図 坂ノ下中世墓群出土板碑実測図⑨(縮尺1/8)



第122図 坂ノ下中世墓群出土石仏実測図① (縮尺1/8)



第123図 坂ノ下中世墓群出土石仏実測図② (縮尺1/8)



第124図 坂ノ下中世墓群出土石仏実測図③ (縮尺1/8)

第13表 坂ノ下中世墓群出土空風輪流量表

(単位 cm)

石造物番号	a	b	c	d	e	f	g	h	I	j	k
S5	(16.6)	(8.5)	0.4	6.8	0.8	9.6	8.0	9.7	10.8	5.9	3.7
S7	11.2	11.2	1.0	6.6	1.3	14.2	10.9	14.0	15.0	7.7	5.3
S9	16.9	8.8	0.8	6.4	0.9	12.1	10.1	12.5	13.1	7.2	5.0
S14	17.1	9.1	0.5	6.0	1.3	11.5	9.5	11.8	12.5	8.5	5.2
S21	17.7	9.3	0.8	6.0	1.5	12.1	9.4	12.4	12.6	7.2	4.5
S23	22.8	12.7	0.4	8.4	1.3	16.2	10.4	12.8	17.1	8.4	5.6
S26・27	19.5	(10.0)	1.0	7.3	1.2	14.8	10.7	14.7	15.3	9.4	4.2
S28	18.4	11.1	0.8	5.9	0.6	13.4	11.5	14.1	14.3	8.3	4.1
S29	19.4	10.9	0.3	6.6	1.5	13.7	10.6	14.0	14.9	8.5	5.4
S30	18.9	10.8	0.3	6.7	1.1	13.4	10.5	13.0	13.9	9.3	4.5
S31	17.9	9.7	0.7	6.2	1.2	12.9	10.4	13.7	13.4	7.4	5.0
S36	20.6	11.7	1.5	6.6	0.8	14.2	11.5	16.1	15.4	8.0	4.9
S37	18.6	10.4	1.2	6.0	1.0	13.2	10.8	13.9	13.9	8.5	5.4
S38	(20.9)	(11.5)	0.5	7.8	1.1	14.2	11.6	14.5	15.8	9.7	6.2
S39	20.2	10.4	0.3	8.1	1.4	13.9	11.8	14.0	15.4	8.4	5.1
S40	20.0	11.4	0.4	7.3	0.9	13.6	10.7	13.6	14.6	8.9	5.3
S43	25.2	13.6	0.9	8.2	2.5	14.9	12.0	15.4	16.0	8.3	6.4
S44	17.5	9.6	0.9	5.8	1.2	11.7	9.2	12.0	12.4	7.7	4.9
S45	20.5	11.6	0.8	6.7	1.4	13.9	10.8	14.4	14.6	8.3	4.8
S51	19.7	10.4	1.5	6.7	1.1	13.7	11.6	14.3	14.9	7.9	5.9
S73	21.7	12.0	1.0	7.4	1.3	14.6	10.6	14.5	15.3	9.2	5.9
S74	19.1	10.3	0.7	7.1	1.0	13.3	11.2	13.1	14.2	7.8	5.5
S85	16.3	9.3	1.2	4.5	1.3	11.5	9.0	11.9	12.0	7.7	4.0
S87	22.4	13.0	0.4	7.8	1.2	16.0	10.4	15.5	16.4	8.5	6.1
S96	18.2	10.3	0.9	5.7	1.3	13.9	10.8	14.3	14.4	8.7	5.6
S108	20.7	10.9	1.0	7.1	1.6	15.8	12.9	16.5	16.8	8.5	5.4
S112	17.4	9.6	0.9	5.8	1.0	14.4	12.6	14.4	14.9	7.5	4.9
S113	(22.8)	(12.4)	0.5	8.1	1.5	16.1	12.1	16.5	17.2	9.9	5.8
S117	(17.9)	(9.0)	0.5	6.6	(1.0)	14.2	10.4	13.1	14.5	8.5	5.2
S134	19.2	10.2	0.8	6.2	2.0	11.8	8.5	12.0	12.8	7.7	4.8
S143	18.3	9.3	1.0	6.5	1.2	13.1	10.3	13.4	14.0	7.7	5.0
S145	19.1	10.4	0.5	7.5	0.7	14.5	12.3	14.5	(14.8)	7.0	5.0
S146	18.4	10.7	0.4	56.0	1.3	12.7	10.8	13.0	13.9	8.6	5.6
S159	22.3	12.5	0.9	7.6	1.3	15.5	10.5	15.2	15.8	8.0	5.0
S162	17.3	8.9	0.7	6.3	1.2	13.3	11.7	13.9	14.5	8.9	5.3
S165	18.5	9.5	1.0	6.9	1.1	12.8	10.9	13.2	13.6	7.5	4.9
S172	18.3	10.5	0.5	5.9	1.4	12.6	8.8	12.4	12.6	7.5	4.0
S188	(18.8)	(11.1)	1.2	6.6	(1.0)	(14.7)	9.7	13.3	(14.8)	6.5	(4.2)
S191	18.0	10.6	0.9	5.1	1.4	12.7	9.4	12.4	12.7	7.6	3.6
S192	18.2	10.5	0.7	5.9	1.1	14.2	11.2	13.6	14.4	7.6	5.5
S194	15.1	10.7	-	-	-	(13.5)	(10.6)	-	-	-	-
S199	18.1	9.9	1.1	6.0	1.1	13.2	10.9	14.1	14.4	8.7	5.7
S208	20.7	11.1	0.7	7.5	1.4	14.7	11.8	14.8	15.5	8.7	4.7
S211	(13.8)	(5.2)	0.7	6.6	1.3	12.3	10.8	13.6	14.1	9.5	5.8
S215	(17.6)	(9.2)	0.6	7.1	0.7	(12.7)	9.9	13.0	13.9	8.2	5.5

第14表 坂ノ下中世墓群出土火輪量表

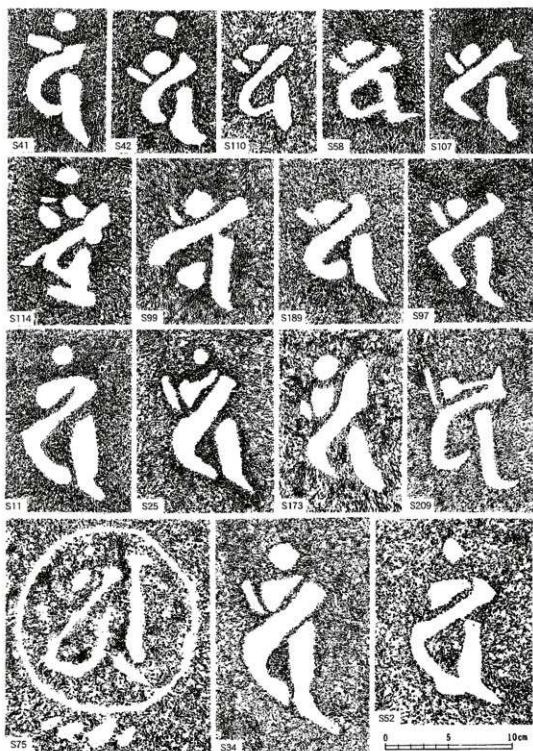
石造物番号	a	b	c	d	e	f	g	h
S24	24.1	25.0	9.6	5.3	14.2	5.1	1.5	4.1
S32	22.6	22.2	7.7	4.6	12.7	3.7	0.9	—
S33	27.7	28.5	10.3	6.0	17.0	5.6	1.5	5.4
S49	24.5	24.2	10.1	4.8	15.3	4.7	0.7	4.9
S53	25.9	25.3	10.4	6.0	15.3	5.1	1.2	5.6
S54	23.4	23.1	9.8	6.0	15.5	5.8	2.0	—
S56	24.8	24.8	9.6	4.4	14.0	6.6	1.4	4.6
S59	25.6	26.3	10.5	5.5	14.6	6.0	0.9	5.3
S61	21.9	23.0	10.2	4.9	11.3	4.3	1.0	—
S69	21.4	21.1	8.5	5.0	13.5	4.8	1.2	—
S80	22.2	23.0	10.9	5.6	15.6	6.3	0.7	—
S82	18.2	17.4	7.3	4.3	11.2	5.4	0.9	—
S88	26.8	27.1	11.3	5.9	16.8	7.3	0.8	—
S92	27.5	27.1	10.9	6.2	18.6	6.1	1.7	—
S95	23.6	24.6	9.7	5.8	15.8	6.1	1.3	—
S100	26.5	26.3	10.4	5.6	17.3	6.7	1.6	—
S105	23.6	23.9	9.8	4.3	13.9	4.9	0.8	4.9
S111	23.6	24.0	9.3	6.3	16.2	5.5	1.6	—
S139	23.0	23.6	8.2	4.9	14.4	7.2	1.5	—
S150	26.7	26.9	10.1	5.4	13.0	5.2	1.0	—
S157	22.3	22.4	10.5	5.6	14.0	4.2	1.6	—
S170	19.1	18.5	8.0	5.9	11.7	5.2	0.3	—
S198	23.6	23.9	8.9	5.2	15.0	6.5	1.5	—

第15表 坂ノ下中世墓群出土水輪量表

石造物番号	a	b	c	d	e	f	g	h	i
S6	(23.0)	(12.0)	(18.1)	—	—	—	—	(9.4)	—
S11	22.6	11.3	19.6	0.6	18.2	0.8	3.7	10.5	4.8
S25	25.5	11.8	21.9	0.7	20.8	0.4	3.4	11.6	4.3
S34	25.8	12.4	21.0	0.6	19.7	0.7	12.4	11.1	4.4
S41	20.5	9.9	13.8	—	—	—	—	10.2	—
S42	27.0	13.4	20.9	—	—	—	—	11.5	—
S52	24.0	12.4	19.2	0.2	18.6	0.4	3.3	11.8	4.1
S58	24.3	12.4	18.8	—	—	—	—	11.6	—
S75	28.3	15.6	24.4	0.2	23.5	0.7	4.8	13.0	4.7
S83	19.2	10.6	14.3	—	—	—	—	9.3	—
S93	27.4	16.0	19.9	—	—	—	—	12.8	—
S97	24.0	11.8	19.6	—	—	—	—	11.6	—
S99	26.8	15.6	19.5	—	—	—	—	11.5	—
S101	(28.4)	15.9	22.2	—	—	—	—	6.5	—
S103	23.7	11.7	17.7	—	—	—	—	11.2	—
S107	23.4	12.9	18.3	—	—	—	—	10.3	—
S110	24.9	12.3	19.6	—	—	—	—	11.2	—
S114	26.3	11.4	21.7	—	—	—	—	9.1	—
S151	(24.0)	10.9	17.7	—	—	—	—	9.4	—
S173	22.0	11.8	17.8	—	—	—	—	(11.7)	—
S174	(26.5)	—	(23.6)	—	—	—	—	—	—
S189	24.3	10.8	17.8	—	—	—	—	8.8	—
S209	25.8	12.8	19.1	—	—	—	—	12.4	—

第16表 坂ノ下中世墓群出土土輪量表

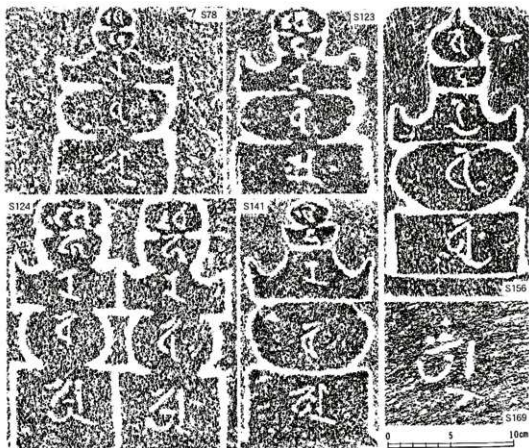
石造物番号	a	b	c	d
S1	25.3	24.7	—	11.8
S3	31.7	31.8	—	17.5
S4	26.4	26.9	—	17.0
S8	29.7	29.4	5.0	15.8
S10	25.8	26.8	5.4	14.0
S13	24.3	24.3	—	15.3
S17	25.3	26.0	5.4	14.4
S18	26.7	27.1	5.6	15.8
S19	28.6	28.4	—	19.5
S20	25.6	25.6	4.9	14.1
S35	29.4	29.2	6.1	18.6
S47	27.2	26.9	—	16.9
S48	25.6	24.8	4.6	16.2
S55	27.0	27.8	5.3	20.6
S57	28.8	28.8	6.2	15.7
S60	29.9	30.9	7.2	14.5
S70	28.8	27.1	—	16.3
S81	27.6	26.0	—	18.8
S84	20.2	19.9	—	16.4
S86	29.9	29.3	—	22.9
S90	28.1	28.1	—	25.6
S94	26.9	27.4	—	18.0
S98	29.1	28.3	—	23.0
S102	30.2	29.9	—	18.9
S104	27.5	27.8	—	19.0
S106	26.0	26.6	—	15.9
S109	27.3	27.2	—	19.7
S118	29.8	30.3	—	22.5
S144	29.0	29.5	—	17.0
S147	31.2	31.4	—	17.1
S158	31.8	31.6	—	15.5
S160	25.2	25.6	—	16.1
S161	26.9	28.5	—	17.4
S169	22.9	22.5	—	16.5
S193	22.6	23.2	—	15.1
S206	27.5	27.6	—	17.0
S207	28.6	29.0	—	15.9



第125図 坂ノ下中世墓群出土五輪塔水輪梵字拓本図 (縮尺1/3)

ものと思われる。座像の足の部分を表現するものも10基（S12、S50、S76、S135、S152、S155、S196、S197、S203、S204）あるが、石質に左右されたためか細部までは表現されていない。

（注）一乗谷朝倉氏遺跡では五輪塔、石仏などから井戸桁、石製火炉（バンドコ）などの日常生活用品まで、幅広く利用された加工しやすい石材である。



第126図 坂ノ下中世墓群出土板碑・地輪梵字拓本図（縮尺1/3）

第8章 坂ノ下中世墓群のまとめ

第6章・7章と坂ノ下中世墓群で確認された経塚・中世墓の遺構と遺物についての事実記載を行ってきた。ここではおおまかではあるが、五輪塔や板碑などの石造物の時期を比定しながら中世墓の造営時期などを検討して中世墓群のまとめとしたい。

第1節 石造物の時期について

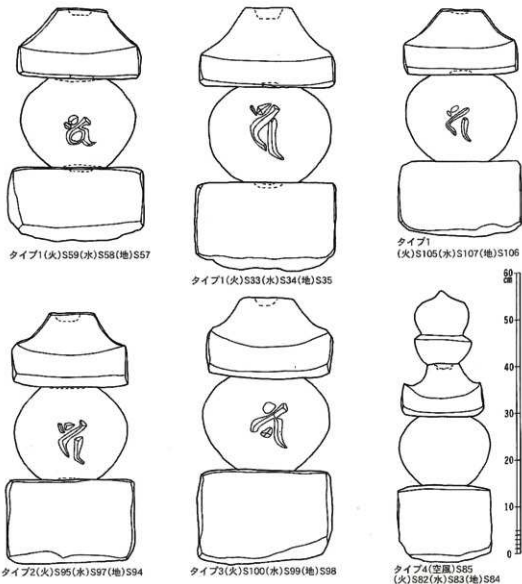
前章の最後で石造物について個々の形態分類を事実記載として述べてきた。しかし、記年銘を刻むものは本中世墓群の石造物でも数が少ないうえに、直接には特定の中世墓には関連しない火山礫凝灰岩（笏谷石）製板碑に限られている。墓に伴う石造物の主体をなす五輪塔、板碑、石仏には記年銘が刻まれていない。原位置を保つ石造物である地輪に伴う蔵骨器は、ほぼ12世紀から14世紀の年代幅に収まるものである。しかし、地輪に隣接・混在する板碑は従来、室町時代後期を中心とするものとされており、これら蔵骨器の生産年代とは大きく違う。つまり、蔵骨器については伝世の問題を考えなければならず、蔵骨器で中世墓の造営時期を決定することはできない。さらに蔵骨器以外で中世墓に伴う遺物で時期を求めることのできる遺物もない。これらのことから、本中世墓群の石造物のほとんどは形態分類によって、本遺跡以外の石造物よりその時期を求めなければならない。

従来、全国各地では地上に露出している石造物を中心に、おおその年代観が論議されてきたが、本県は特に板碑など記念銘のある石造物が少なかったためか、他県よりその研究はおくれている。ここでは主に近県の既往の研究を中心にして、本中世墓群石造物の時期について検討していきたい。

五輪塔

五輪塔はすべて組合式五輪塔で、一石五輪塔は1基も存在しない。空風輪と火輪が一体になった空風火輪と呼称すべきものが1基ある以外は、空風輪・火輪・水輪・地輪の4部位にわかれていることはすでに述べた。それぞれの部分がA～D各群で出土しているが、個々の部分が点在して出土しており、4部位がすべて完全な原位直（つまり組まれた状態）で出土した例はない。石材には花崗岩を用いており、空風輪の頂部、火輪の軒先など細部の遺存状態は良くない。そこでまず、地輪を除いて行った五輪塔各部分ごとの分類が、本中世墓群でどのような分布傾向にあるかを検討してみる。本中世墓群はほぼ南北の等高線に沿って細長く展開するため、転落などによる移動が中心で、人為的な移動の可能性が少なくない。つまり南北方向（ここではA、B、C群とD群間）の移動の可能性は小さく、東西方向（C群とA、B群、もしくはD群内）の移動の可能性が大きいと考えられる。この分布傾向を部分ごとに見ていくと、火輪のⅠ類はA、B、C群、Ⅱ類はD群を中心に

分布し、Ⅱ類はD群でも特に石造標式群に分布する。水輪のⅠ類はA、B群のみに分布し、Ⅱ類はA・B・C・Dのいずれの群にも分布する。しかし、Ⅲ、Ⅳ類ではD群でも特に石造標式墓群に分布する。地輪についても幅に対して薄い（器高の低い）地輪はA・B・C群が中心であり、D群では厚い地輪が多くなる。火輪、水輪は、従来の石造物年代観によるとⅠ類からⅢ、Ⅳ類へと、地輪は幅に対して薄いものから厚いものへと変化したと考えることができる。しかし、空風輪の分類はその分布傾向が前三者と大きく異なる。Ⅰ類はD群を中心にA・B群にも分布し、Ⅱ類はA・B・C・D各群全体に分布する。Ⅲ類はD群にのみ分布する。つまりⅢ類を除く、Ⅰ・Ⅱ類とも各群に



第127図 坂ノ下中世集群出土石造五輪塔組み合わせ復元想定図

分布の特色はないと言えよう。

ところで、地輪は原位置を保つものが多いが、空風輪は原位置に近いと思われるものが1基のみで、総基数は地輪よりも多い。火輪・水輪は総基数も各群の基数もよく似ている。以上より、空風輪は今回の調査区外よりの転落品が多数あるのではないかと考えられ（具体的にはC群東方などより）、その分布は本来空風輪が属する中世墓群と異なる可能性が大きい。よって次に空風輪を除き、出土状態などより組み合わせるとと思われる火輪・水輪・地輪の復元例を述べていきたい(第127図・図版第八十三)。

タイプ1はC群25号中世墓出土の地輪(S57)と組みになるとと思われる火輪(S59)、水輪(S58)である。地輪の上に水輪が正位で乗り、火輪が西脇に転落した状態で出土した。火輪はⅠ類、水輪はⅡ類に属し、地輪高は幅の半分ほどを占める。同じくタイプ1に属するのはB群16号中世墓方形区画北側出土の火輪(S33)、水輪(S34)、地輪(S35)である。原位置には留まらないが、周辺にはほかの石造物がないことからB群に伴う五輪塔と考えられる。火輪はⅠ類、水輪はⅡ類に属するが、地輪高は幅の60%強を占める。また参考までにD群50号中世墓出土の地輪(S106)付近にある火輪(S105)、水輪(S107)も組みとなる可能性がある。火輪はⅠ類、水輪はⅢ類に属し、地輪高は幅の62%を占める。

タイプ2はD群48号中世墓出土の地輪(S94)と組みになるとと思われる火輪(S95)、水輪(S97)である。地輪の上に火輪が正位で乗り、両者の間から飛び出した形で、水輪が西脇で出土した。火輪はⅡ類、水輪はⅡ類に属し、地輪高は幅の67%を占める。

タイプ3はD群45号中世墓の出土の地輪(S98)と組みになるとと思われる火輪(S100)、水輪(S99)である。地輪の上に水輪がかろうじて乗り、火輪が西脇に転落した状態で出土した。火輪はⅡ類、水輪はⅢ類に属し、地輪高も幅の80%を占める。

タイプ4はD群41号中世墓出土の地輪(S84)と組みになるとと思われる空風輪(S85)、火輪(S82)、



第128図 教賀市内所在寺院にある記年銘のある板碑
(左：妙泉寺、右：来迎寺の大永6年銘板碑)

水輪（S83）である。火輪と水輪がわずかにずれるものの、正位に近い状態で出土した。また空風輪は北側地輪の上面で出土した。これらは本中世墓群の五輪塔の石材とは異なる凝灰岩であり、出土状態ともあわせてこの復元例は確実であろう。空風輪はⅠ類、火輪はⅢ類、水輪はⅣ類に属し、地輪高も幅の82%を占める。

タイプ1とした3基の復元例はいずれも火輪の屋根がほとんど反らず、幅に対して高さも低い。水輪の最大径はほぼ中央位にある。地輪は幅に対して厚みを持たず、いわゆる横長である。これらの特徴からして、タイプ1は南北朝時代（14世紀前半～14世紀末葉）と考えられる。

タイプ2は火輪の屋根がわずかに反り、軒先端もわずかに跳ねる。水輪の最大径にはさして変化はないが、地輪はやや厚みを増す。

タイプ3は火輪の軒全体が反り、水輪の最大径がやや上位に移る。地輪はタイプ2とほぼ同じである。タイプ2、タイプ3はタイプ2がタイプ3にやや先行すると思われるが、いずれも室町時代前期（14世紀末葉～15世紀中葉）と考えられる。

タイプ4は火輪の屋根が大きく反り、軒先端も上方へ跳ね上る。水輪の最大径も明らかに上位へ移っており、俗に「鉄鉢形」と称されるものに近い。また地輪の厚みも幅に近くなる。タイプ1・2・3と比較すると明らかに装飾性が強くなっている。タイプ4は室町時代後期にあたる戦国時代（15世紀後半～16世紀後半）と考えられる。

五輪塔板碑

本中世墓群の五輪塔板碑について述べる前に、まず今回の報告に際して確認した敦賀市内にある寺院所在の板碑を概観してみる。妙泉寺は敦賀半島の先端に近い浦底にある。現在も使用されている墓地の一角に20～30基の板碑が集積されているが（第128図左）、これらをすべて取り出して観察することはできなかった。本中世墓群に関係すると思われる板碑で記年銘を確認できたものはなかったが、同類の板碑が敦賀半島の先端にまで分布していることが判明した。敦賀市街地西部の松島町にある永建寺には石造物を集めて固定した総塔のようなものがある。ここに本中世墓群と同様な石造物が多数あり、朝倉氏遺跡で多数見られるような火山礫凝灰岩製・石五輪塔もある。これらとは別に数カ所に中世の石造物が数基ずつまとめられており、このなかに本分類でⅠ類とⅣ類に相当する板碑がそれぞれ1基ずつある。Ⅰ類に相当する板碑は「南無妙法蓮華經」の題目と文明17年（1475）の記年銘を刻む。Ⅳ類に相当する板碑はキリークの梵字と「永春首座」の文字と永禄元年（1558）の記年銘を刻む。永建寺と同じ松島にある米迎寺境内にも数基ある。そのなかに本分類でⅠ類に相当する板碑が1基ある。この板碑は碑面に天臺と蓮台を陽刻し、「南無妙法蓮華經」の題目と大永6年（1526）の記年銘を刻む（第128図右）。

以上のように、敦賀市内の寺院に現存する板碑について述べてきたが、本中世墓群と同類の石造物が敦賀半島の先端部まで分布することは判明したものの、まったく同じ形態の板碑に記年銘を確認することはできなかった。これは記年銘が刻まれる石造物は特定類に限られ、本中世墓群ではこれらに相当する特定類の石造物はなかったであろうと考えられる。特に今回、記年銘を確認したのは題目を刻む板碑と笠塔婆や宝篋印塔を陽刻し、本中世墓群の板碑より作りが良い板碑に限られるのではないかとということである。それがたまたま偶然によるものか、寺院、または墓

地の性格（宗派や被葬者の階層など）については現段階では判断する資料は確認していない。一方、教賀に隣接する滋賀県の大津市雲山遺跡や坂田郡伊吹町弥高寺跡でも同類の五輪塔板碑、または花崗岩製石仏などを確認しているが、これらにも記年銘は確認されていないようである。

如来座像板碑・石仏

如来座像板碑、石仏の両形態とも、教賀市内の寺院では記年銘を持つものを確認することはできなかったが、滋賀県彦根市妙楽寺遺跡では発掘調査で出土し、その大まかな時期が判明している。妙楽寺遺跡は彦根市日夏に所在し、宇曾川の改修工事に伴い発掘調査が行われて、平安時代から安土桃山時代（12世紀後半～17世紀末葉）の集落遺跡が検出された。妙楽寺遺跡が最も盛えたのはⅣb期とされる室町時代後半（戦国時代）であり、この時期にいたっては都市遺跡の呼称が適切かもしれない。同期の町割の一部である水路の護岸用石材に石造物が用いられている。石造物は報告書で確認する限りは、本中世墓群出土の如来座像板碑や石仏と同じ形態である。この水路は前述した室町時代後期の延徳年間（1490）～永禄年間（1570）の時期に比定される陶磁器類が出土している。石造物は護岸用石材に用いられているのであるから、その上限については確定できないが、下限については下っても戦国時代末葉と考えられる。このことから本中世墓群の如来座像板碑、石仏ともほぼ戦国時代に相当すると考えられる。なお、同類と考えられる如来座像板碑や石仏は京都府中郡大宮町にも分布するらしいが、報告書では写真のみ掲載されているのみで、石材や細部にいたる形態は不明である。

火山礫凝灰岩製板碑

火山礫凝灰岩製板碑は4基を数えるのみであるが、前述のように大文16年（1547）銘と大正11年（1926）銘を刻むものが2基ある。現在教賀市で火山礫凝灰岩製石造物の初現は来迎寺の明応4年（1495）銘の六体地藏である。このことから本中世群の火山礫凝灰岩製板碑も室町時代後期にあたる戦国時代（15世紀後半～16世紀後半）に属し、石材産出地に近い朝倉氏遺跡では火山礫凝灰岩製石造物の最盛は戦国時代でも後半であることから、本中世墓群でも同期を中心とすると考えられる。

以上のように、五輪塔については室町時代全般にわたる時期が考えられるが、板碑や石仏などは戦国時代にはおさまる時期であり、江戸時代には下らないと言えよう。

参考文献

- 『宇曾川災害復旧助成事業に伴う妙楽寺遺跡Ⅲ』1989年 滋賀県教育委員会 財団法人滋賀県文化財保護協会
 『大谷古墳』1987年 京都府大宮町教育委員会

第2節 骨片の出土状況について

本遺跡では表土中に流出しているものなど移動した可能性があるものを含めて、100ヶ所の骨片出土地点を数える。なお個々の骨片の出土地点については、中世の遺構の最初で表と位置図をつけて示した（第44図・第7・9表）。

これらの出土状況は以下のように5つに分類することができる。

- (1) 蔵骨器などの容器に納められているもの。特殊な例として石組の小穴に納められる例がある。
- (2) 出土状況からなんらかの有機質容器に納められていたと想定される。容器は遺存していないもの。
- (3) 断面などより小穴などの掘り込みなどが確認されるもの。
- (4) 掘り込みなどがまったく確認されず、周辺の地山の土と骨片を含む土との違いが明確ではないもの。
- (5) 骨片の出土範囲が集中せず、散布するように出土したもの。

以上、最後の(5)については埋葬後に攪乱されて、流出した可能性が高いと考えられる。

ところで、容器に納められているもの、または納められていたと思われる場合を除いて、直接土中より出土した骨片については、埋葬当初の骨片すべてが遺存しているとは限らず、土中で分解して遺存しない骨片の存在も考えられる。A・B・C群では骨片の出土量が10g以下と極端に少ない例は5ヶ所を数えるのみで、そのうち3ヶ所は付近の埋葬地点より流出したものと考えられる。つまり骨片出土35ヶ所に対して94%を占める33ヶ所は10g以上の骨片が出土している。

一方D群では石造標識墓群中央列の骨片出土地点は7カ所を数えるが、そのうち2ヶ所(B70、B75)を除く5ヶ所(B69、B71～74)は骨片が移動した可能性はないと考えられる。この移動した可能性がないと考えられる5ヶ所のうち、4ヶ所では3g以下とごく少量の骨片しか出土していない。5ヶ所のうち残る1ヶ所は蔵骨器内より140gの骨片が出土している。また他出土地点の出土状況と比較しても、極端に骨片の出土量が少なくない4ヶ所に限って、土中で分解した骨片の量が多いと考えることはできない。ではいかなる理由が考えらるであろうか。結論を先に述べると、次のように考えられる。石造標識墓群中央列に限ると、地輪と検出した地山面の間に、さらに多くの盛土があった。そして埋葬後、時間を経るにつれて、この盛土が当初埋葬された骨片の一部とともに流出したと考えざるをえない。このことは42号墓蔵骨器の垂削下部はほぼ完形であるが、胴上部は地輪の重みで押し潰された状態で出土し、さらに押し潰された胴上部の破片数点が周辺よりも出土していない事実から何うことのできる事実である。この想定が正しければ、D群の石造標識墓のなかで、ほぼ原位置と思われる石造物で骨片を伴わないものについても、当初は骨片が存在した可能性もある。またA、B群の骨片を伴わない方形区画遺構で区画内部に石を充填していないものについても、当初は前述の理由から骨片が存在した可能性がある。しかし、同じ方形区画遺構でも区画内部に石を充填するものについては、判断する材料がないため、この問題に関して保留することにする。

第3節 中世墓の造営時代と造営者 ～中世墓群のまとめにかえて～

これまでの事実記載として墓の形態を、方形区画墓・集石墓・石造標識墓などに分けたが、形態で時期を決定することはできず、ましてや墓に伴う遺物も少なく、一部の石造物がおおよその時期を示すに留まるだけである。個々の墓の時期について述べることができないため、A～D群にまとめてそのおおよその時期を比定し、本中世墓群の変遷について考えて最後のまとめとしたい。